

Bulletin 281

2019 秋号



COLONNADE

特集：「住」について考える 第1弾 建築ウォームアップ 一家づくりのはじまりかたを探る—
連載：日本の建築界におけるSDGs

FORUM

JIAで公共空間の使い方を提案する／海外レポート／覗いてみました他人の流儀／温故知新
日本版CABEを考える／未来へ継承したい風景／建築写真について／活動報告



国産BIMだからこそ実現可能な 設計初期段階での法規チェックに注力

株式会社建築ピボットは、「DRA-CAD」など設計支援パッケージ製品を開発・販売する株式会社構造システムの子会社として2004年に設立されました。もともと1社で扱っていた製品を顧客に応じて3社に分け、株式会社構造システムが建築構造に関するプログラムを、株式会社建築ピボットがCADやBIMなど建築設計で利用できるプログラムを、株式会社FMシステムが建物や施設の運営・管理に関するプログラムを開発しています。現在、CAD・BIMの技術を用いたプログラムと、建築法規を確認できるシステムを開発・販売している株式会社建築ピボット 千葉貴史社長に、主な製品についてうかがいました。

30年前の図面データや 他社のフォーマットも編集可能

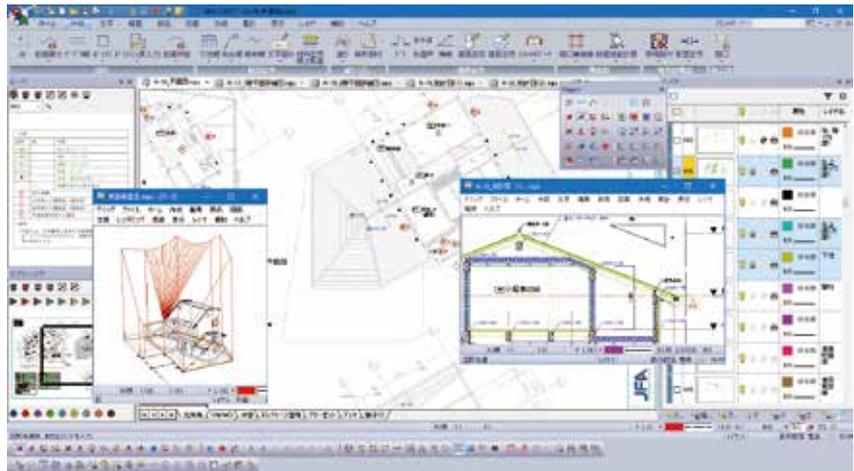
当社は、設計の基盤となるCADや建築法規の確認を行うシステム、省エネルギーや環境に配慮した設計を支援するシステムを開発しています。

建築設計CAD「^{ドラキヤド}DRA-CAD」は、2年前前に発売から30年を迎えました。毎年のように機能を追加しながらバージョンアップを重ねてきました。基本機能の充実はもちろん、プレゼンテーション用のパースを作るのに便利な形状をモデリングできる3次元機能、さらにこの機能を拡張するかたちで、日影計算や天空率計算など建築法規のチェックができる専門機能が充実しています。

また、AutoCAD、Jw_cadなどさまざまなデータフォーマットとの互換性に優れており、データはあっても読み込めないということのないように、互換性を担保することに努めています。30年前の図面データも読み込んで編集し直すことができますので、データ変換ツールとして利用されているお客様もいらっしゃいます。PDFをCADデータに変換することも可能です。

法適合確認ができる3次元ソフト

3次元建築設計システム「^{アイアーム}i-ARM」は、BIM機能を搭載した3次元ソフトウェアです。「DRA-CAD」が線分や面といったプリミティブな形のデータを扱うのに対し、建築を柱、梁、壁、床というようにオブジェクトとしてモデル化し、管理することができます。



「DRA-CAD」の作業画面

(データ提供：深滝准一建築設計室様)

ただ、皆さんが思い浮かべるBIMとは少し違い、「i-ARM」は3次元モデルと地図情報などを利用して、ボリューム算定や法規確認をしたり、日射量や天空率などの解析ツールの充実に入力しています。設計初期段階は敷地調査や法規確認など煩雑な作業が多くあります。我々は国産のメーカーですので、日本の建築法規に対応し、設計者の皆さんが設計初期の段階で十分に法規を確認・検討していただけるように、確実にサポートしていきたいと考えています。

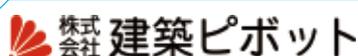
「i-ARM」は、Office365のように、年間使用料のみでいつでも最新版を使用することができます。初期費用やバージョンアップ費は必要ありません。

プログラム同士の連携

その他、選択肢の多い設計初期段階で省エネ計算ができる「SAVE-建築」・「SAVE-住宅」や、避難安全検証法の検証計算(ルートB)を行う「避難検証法」、日影・天空率・斜線・日射量を計算する建築計画ソフトウェア「LAB-SS」などがあります。

そしてこれらは他のプログラムと連携することができ、例えば「i-ARM」でモデリングしているデータを使って「避難検証法」で計算することも可能です。

当社のプログラムは、使いたい時に必要な期間だけライセンスを取得する、レンタル形式のサービスも提供しています。ぜひ、お気軽にお問い合わせください。



株式会社 建築ピボット

<https://www.pivot.co.jp/>

CAD・BIMの技術を利用して、建築設計のさまざまな場面で利用できるWindows向けプログラムを開発。日影、天空率、避難などの建築法規の確認を行う設計支援システムも扱う。

〒112-0014 東京都文京区関口2-3-3 目白坂STビル6F TEL: 03-6821-1691 FAX: 03-5978-6215

■製品についてのお問い合わせは、本社営業まで、上記電話かFAXでご連絡ください。

CONTENTS

COLONNADE

4 特集：「住」について考える

第1弾 建築ウォームアップ 一家づくりのはじまりかたを探るー

- | | | | |
|----|----------------------|-------------|------|
| 5 | かたちは屋根から考える | i+i設計事務所 | 飯塚 豊 |
| 6 | 人脈とメディアが仕事につながる | 中村高淑建築設計事務所 | 中村高淑 |
| 7 | 建て主の迷いを受け止めるラフ提案 | リオタデザイン | 関本竜太 |
| 8 | 施主をよく観察し、最良の案を提案 | 手嶋保建築事務所 | 手嶋 保 |
| 9 | 土地の潜在的なポテンシャルを調査 | SUEP. | 末光弘和 |
| 10 | 設計前の「お見合い期間」で施主を理解する | 若原アトリエ | 若原一貴 |
| 11 | プレゼンテーションまでの3つの流儀 | TNA | 武井 誠 |

12 連載：日本の建築界におけるSDGs 第1回

- | | | |
|--------------------------------------|-----------|------|
| 『SDGs建築ガイド日本版』からSDGs建築フォーラムへ | 日本設計 | 六鹿正治 |
| 国連SDGsについて ー地球上におきている課題を自分のこととして捉えるー | 高階澄人建築事務所 | 高階澄人 |

FORUM

15 連載：JIAで公共空間の使い方を提案する 第1回

- | | | |
|------------------|-------------|------|
| ノマディック・ルーフを港湾緑地へ | 小山将史建築設計事務所 | 小山将史 |
|------------------|-------------|------|

16 海外レポート 海外アワードでつかんだ手応え

家所亮二建築設計事務所 家所亮二

18 覗いてみました他人の流儀 中村好文氏に聞く 自分らしく住宅と家具にこだわり続ける

Bulletin編集WG

21 温故知新 先達から学ぶ

野沢正光建築工房 野沢正光

22 抱負を語る 建築を仕事にすること

コバルトデザイン 星野千絵

抱負を語る 丁寧な仕事を以て社会へ貢献する

現代設計 村重盛紀

23 日本版CABEを考える これからの空き家対策と建築家への期待

市民未来まちづくりテラス 松本 昭

24 連載：未来へ継承したい風景 第1回

地域に残したい風景 一品川・大田エリアの景観・歴史・環境遺産ー

木村都市建築デザイン事務所 木村利雄

26 連載：建築写真について 3 築地・銀座周辺まち歩き(前編)

建築家写真倶楽部

28 活動報告 交流委員会Bグループ 熱海サロン

化研マテリアル 正岡智子

29 交流委員会Fグループ 新宿地域冷暖房センター見学記

小内建築設備設計 小内 實

BACKYARD

30 広報からのお知らせ

31 ひといき まちづくり・酒づくり

Yui建築工房 羽鳥 悟

31 編集後記

2 パートナーズアイ 株式会社建築ピボット 国産BIMだからこそ実現可能な 設計初期段階での法規チェックに注力

公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館

Tel: 03-3408-8291(代) Fax: 03-3408-8294

<http://www.jia-kanto.org/members/>



第1弾

建築ウォームアップ

家づくりのはじまりかたを探る

はじめに

公益社団法人日本建築家協会 JIA 関東甲信越支部の広報誌である『Bulletin』は、現在、特集や連載など、オリジナルの記事を中心に構成した冊子づくりを目指しています。さらに、今年度から特集に関して年間テーマを設け、数号にわたり通して楽しんでいただけるかたちを検討しています。

今年度は、建築の根源的なテーマである「住」にスポットを当て、秋号、冬号、春号と特集していきます。建築家の取り組み、社会的な風潮、第三者的な視点などの観点から、「住」について改めて考えてみたいと思っています。

今号：建築ウォームアップ(家づくりのはじまりかたを探る)について

近年、ネット環境も充実し、スマホで簡単にホームページにアクセスできるのは勿論、施主と設計事務所をつなげるようなサイトも存在し、書籍以外でも建築家の作品が一般の施主の目に触れる機会が非常に多くなってきています。しかしそれらの作品は、完成写真中心に掲載されたものがほとんどで、建築という行為がはじまる入り口部分、依頼の受け方からプランニングに至るまでの導入部分に関しては、あまり今まで公開されることがありませんでした。

作品がどのように受注され、どのように製作にとりかかりはじめるのか。施主との接点や考え始めるきっかけとなる作業など、建築家同士でもお互いに知ることの少ない、各自、各設計事務所ごとの取り組みがきつとあるでしょう。

今回の特集では、このような、依頼のきっかけからヒアリングを経て初回プレゼンにたどり着く過程をメインにして、普段語られることの少ない皆さん各々がオリジナルとしている取り組みを、比較的コンスタントに住宅設計を手がけている40代50代の設計事務所の方々に紹介していただきました。

(『Bulletin』編集長 長澤徹)



かたちは屋根から考える

1966年東京都生まれ。1990年早稲田大学建築学科卒業。1990年都市設計研究所入所。1992年大高建築設計事務所入所。2004年i+i設計事務所を設立。2011年～法政大学「構法スタジオ」兼任講師。「グランドピアノのある家」で第4回エコハウス大賞グランプリ、「伊賀の家」でエコハウス・アワード2019「意匠賞」受賞。

i+i 設計事務所
飯塚 豊



依頼はインターネットや本から

私は大学卒業後すぐ建築家大高正人さんの事務所で13年働き、都市計画や大型の公共建築の設計を経験。独立後は、一転して木造戸建て住宅の設計を中心に活動。2019年現在で設計した住宅は70軒を超えました。

異分野に飛び込んだ関係で、独立当初から集客はインターネットを積極的に活用してきました。①ブログを頻繁に更新する、②スタッフブログ・お客様ブログとリンクする、③信用づくりのため雑誌掲載なども積極的に記事にする、④検索を意識して文章ボリュームを増やす、といったやり方で情報発信を行ってきたので、過去70軒のうち90%以上がネットからの依頼となっています。2014年に著した『間取りの方程式』の出版後は、本を読んだ方からの依頼が多くなってきています。

また、ここ数年は超高断熱の案件にも積極的に取り組んでいます。性能を踏まえたデザインができる設計事務所ということで、高性能住宅を得意とする工務店とのコラボや、モデルハウスの依頼も徐々に増えてきています。

要望はスクラップブックにまとめてもらう

ネットからのお客様は要望・好みも千差万別なので、要望書は写真入りのスクラップブックの形でまとめてもらうことが多いです。それを見ながら、敷地にはどんな特徴があるか、その家は何をテーマとすべきかといったことを、最初の面談の際に相談しています。また、家づくり費用の総額を把握するために、Excelの予算書を最初の面談の際にその場で作ってお渡ししています。

平面、立面、断面を1枚にレイアウト

私はスケッチを描かず、最初からCAD上でスタディすることも多いのですが、立体的に建築を考えるため、図面化するときは必ず、平面・立面・断面を1枚の図面にレイアウトし、いっぺんに描きます。CGソフトを使って3次元上で斜線を描き、CGの中でいきなり形を考えることもよくやっています。

住宅設計の現場では、①間取り→②構造→③屋根の形という順番で設計がされることも多いと思いますが、これが、町の景色をダメにする1つの原因であると考えて

います。私はいつも、①敷地条件から屋根の形を決める→②屋根の形を手掛かりに構造を決める→③構造を意識して間取りを決める、という、逆の順番をイメージしながらスタディを進めています。

模型とCGを使い分ける

建て主が図面を見て、空間の広がりや把握できるケースはめったにありません。建て主は平面図の畳数の数字だけ見て「狭い」と言ったりしますから、打ち合わせの際は、必ず1/100の模型を見せ、立体で案を把握してもらうようにしています。

一方、素材や色を把握してもらうときはCGを利用します。最近では、ファーストプレゼンの際に、素材や色のわかるウォークスルーのCG動画を作成し、空間と素材・色を同時に理解してもらうこともよく行っています。

温熱や構造の計算はソフトを利用

性能の確保も重要視しています。どんな案件でもUA値や η AC値は算出しています。開口部は樹脂サッシを基本としているので、付加断熱のない標準的な仕様の案件でもUA値は0.5前後(東京ではHEAT20のG1とG2の間くらいの値)の値となります。さらに、断熱がテーマとなる場合には、温熱のソフトを使って「室温シミュレーション」や「年間の冷暖房費」などを算出しています。

同様に、構造もソフトを利用し、壁量のバランスや必要となる床倍率を、できるだけ計画の初期の段階で検討するようにしています。



オーガニックスタジオ新潟とのコラボ案件(第4回日本エコハウス大賞グランプリを受賞)

人脈とメディアが仕事につながる

1968年東京都生まれ、静岡県三ヶ日町(現・浜松市)出身。1992年多摩美術大学美術学部建築科卒業。同年店舗併用の自邸を手がける。1993～99年大岡山建築設計研究所・多摩美術大学キャンパス設計室。1999年独立、改組を経て現在に至る。2001年デザインコラボレーショングループ「unit-H」を共同設立。

中村高淑建築設計事務所
中村高淑



処女作は店舗併用の実家。大学卒業と同時に手がけた。そこに自分も住んで家業の内装業を継ぐつもりが、初めての実作に感動し設計を志すことに。縁あって多摩美の田淵諭先生が主宰する事務所で修行を積んだ。先生からは「近所の人や趣味の仲間に同級生、建築科の同期からも依頼がくるから付合いはしておくといい」と言われたが、確かに今まで大学関係だけで9軒(うち建築科同期から2軒)の依頼があった。

独立後、開業案内を見た多摩美テニス部の後輩が依頼してくれた。厳密にはマンションの購入を相談されたのだが、「戸建のほうがいいぞ」とプレゼンして依頼するように仕向けた、と言ったほうが正しい(笑)。この家が雑誌に掲載されて、Webサイトにも載せると他人様からの依頼が来た。同時期に多摩美同期・渋谷耕治とコラボレーショングループ「unit-H」を共同で立ち上げて2軒が完成、オープンハウスを開催したところ、これが新たな出会いにつながり、建築家住宅ブームにも乗って幸いにも仕事と仲間に恵まれた。

以降、20年で約80軒の住宅を手がけてきた。独立直後には建売の設計もあったが、次第に個人からの直接の依頼でほぼ100%に。コンペには原則参加しない。ピーク時は16軒が同時進行し、うちWeb経由が1/3、雑誌経由が1/3、紹介が1/3くらいの時期が10年以上続いた。現在は自邸+アトリエの完成を機に、働き方改革ではないが、年齢的にも仕事へのスタンスを変えて少量を少人数で丁寧に、自由業的な生活を謳歌しつつ……、という聞こえはよいが、実態は一般向け住宅誌が次々と休刊、Webも飽和状態、建設費の高騰に若手の台頭、スタッフの人手不足が拍車をかけて受注機会が減ったというのが正直なところか。現在は同時進行が4軒で内訳はWeb経由が1/4、雑誌経由は0、紹介が3/4である。

横浜青葉区の自宅の一室で開業、地方出身なので地縁血縁は期待できないが、近郊の作品が半数近くと開業場所としては良かったようだ。Uターンは考えず、一時、都心に東京事務所を置くも大きな成果はなかった。紹介以外の仕事の接点としては、インターネットや雑誌とい

うメディアが大きな役割を持つ。雑誌には対外的な信用が高まる効果もある。また、紹介にせよ、雑誌経由にせよ、必ずWebサイトを見てメールで連絡が来る。ということはインターネットが最も出会いの場であると言えよう。ちなみに電話でのコンタクトはごく稀でしかも成約率が低い。TVは反響が大きい割に依頼に結びついたことはまだない。なお、JIA活動をご縁に4軒ほど依頼を受けた。

メールは雛形を用いて即時返信する。原則として面談は事務所で行い無料、指定場所に出向く時は出張費をいただく。初回面談で予算や設計の進め方、成果物(近似例の作品概要と竣工図一式)などを説明、希望に応じて近隣の実作見学も行う。面談は3～4時間、最長で8時間。その際に家族構成や仕事、趣味や性格などを中心に大雑把にヒアリングする。定型のフォーマットは早々にやめて、自由に箇条書きの要望書をメールでもらう。最短で4行、最長はA4用紙に細かく写真付きで8枚ほど、人となりや優先事項がよくわかる。仮に要望漏れがあっても実施設計時に100枚以上の図面を用いて打合せするので必要なタイミングで必ず拾うことができる。

初回プレゼンから有料(ラフプラン25,000円+下見5,000円+予算書5,000円、その他の図面や模型などはオプションで別途)。エスキス時点からCADを使い、初回は模型や3D、(美大出だが)手描きパースやスケッチは提示しない。初期はイメージや味に頼ることなく客観的でニュートラルな図面と数字で提案する。成約率は30～40%程度に収斂されようか。

住宅はよい仕事をして、毎年家を建て続ける個人はいない。依頼の継続性は住宅作家の悩みのひとつだろう。JIAを通じて建築家住宅の楽しさを社会に広めていきたい。



中村自邸+2つのアトリエ
(撮影: GEN INOUE)

建て主の迷いを受け止めるラフ提案

1971年埼玉県生まれ。1994年日本大学理工学部建築学科卒業。1994～99年エーディーネットワーク建築研究所。2000～01年フィンランド ヘルシンキ工科大学（現アールト大学）留学。2001年、現地の設計事務所でプロジェクトに関わる。帰国後、2002年リオタデザイン設立。

リオタデザイン
関本竜太



私の主宰するリオタデザインでは、設計依頼（または相談）でご来所下さる方の多くは、私が週1度程度の頻度で更新するブログの内容を深く読み込んでくる。私にとって日々を綴ったブログは、特に営業目的で書いているわけではないのだが、一般の建て主にとってブログは、設計者の人柄や考え方を知る重要な手がかりになっているようだ。そのため、私もブログは業務日誌のような内容ではなく、休日に過ごした内容だったり、日々仕事で感じたことなどを、なるべく素直に表現するように心がけている。

ご相談に見えた方にまずお話しするのは、私の設計ポリシーではなく（それはブログで予習済み）、むしろどこにいくらお金がかかるのかという全体予算の説明がメインとなる。工事費以外にも、設計料や造園その他の工事など、家づくりではその出費は実に多岐にわたり、建て主には全体像を掴むのが難しいためだ。

工事費も、満足のゆくクオリティで引き渡せるように、坪単価の目安なども率直にお伝えして、最低限の費用ラインを明確にしておく。折角相談にいらして下さった方に、いきなり現実を突きつけるようで忍びない気持ちにもなるが（そして実際にこの説明で相談者は半分以上に減る）、楽観的に安くできるというアピールをすると結果的に自分の首を絞めることになる。心を鬼にして、一定の基準以下の仕事はできないと線を引くことも、事務所の仕事の水準を保つためには重要なことと考えている。時に厳しいローコスト案件も引き受けるが、建て主の熱意や覚悟の度合いにもよるかもしれない。

お互いの条件が噛み合えば、設計提案に進む。リオタデザインでは無料の設計提案はしない建て前としているが、裏メニュー的に無料のラフプラン提案というものを行っている。

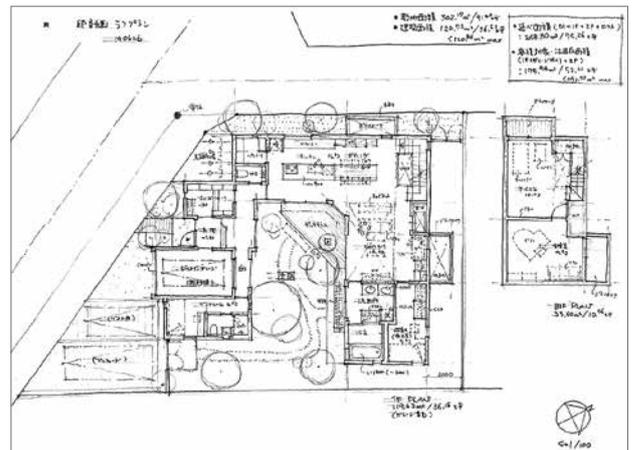
これは本提案（有料）をする前のドラフト（下描き）的な位置付けで導入したものだが、この効果は絶大だ。その第一はまず、提案さえ行えばその案の魅力からつなぎ止めることができるであろう見込みの建て主を、有料提案というハードルから戻込みしたり、結果として他社に流れるのを留保する効果がある。次にドラフトを開示する

ことで、その時点での自分の思い違いや、案の大外しを防ぎ、より確実な提案を本提案でぶつけることができるといったこともある。建て主にとっても、設計者に安くはない費用を払って提案をしてもらうのに、大外しをされたら落胆するだろう。また提案での違和感をうまく口に出せない建て主も多いようだ。「とりあえず、ラフでも出しましょうか？」の言葉は、腰の引けた建て主の腰を上げさせる効果も大きい。

そのラフ提案の内容だが、基本は手描きでしかもフリーハンドで描く。誤差を防ぐために、実は用紙の下に置いたCADで引いた下図をなぞっているのだが、これにも意味がある。本当にラフだと、のちにCADに移行した際に誤差が大きすぎて納まらなくなることがあるからだ。「考えは完璧に、仕上げはラフに」これも重要なポイントとなる。

線を手描きで表現すると、こちらのニュアンスも反映できるし、建て主の揺れ動く感情も受け止めやすくなる。案の説明をしながら、相手の表情を見てその場で消しゴムで消したり、線をどんどん上書きして行って、相手の感覚との温度差をその場で埋める。問題解決は、相手の顔を見てその場で行うのが鉄則だ。

ここまで素地を作ってしまうと、その次の本提案は揺るぎないものになる。本提案を受け入れていただければ、そのまま設計契約へと進む。これは筆者の鉄板の受注パターンである。



ラフスケッチ案

施主をよく観察し、最良の案を提案



手嶋保建築事務所
手嶋 保

1963年福岡県生まれ。1986年東和大学工学部建設工学科卒業。1990～97年吉村順三設計事務所。1998年手嶋保建築事務所設立。現在、関東学院大学非常勤講師。著書として、『「伊部の家」原図集』（オーム社）、『住宅設計詳細図集「伊部の家」』（オーム社）、『MIAKI』（millegraph）。

大半の依頼はWebページを見て

私は住宅設計を中心に建築家としての活動を続けています。今は順調でも何も努力なしに仕事の依頼が来る保証がないのは当たり前の事実です。一方で、建築家というのはプロフェッションである以上、依頼されてこそできる仕事だと思います。

私に依頼してくださる方が何を来て来るのか気になるので、初回の面談で尋ねるようにしています。そこから2つの傾向が見えてきます。まず、90%以上は、見知らぬ人からある日直接、事務所にメールや電話で問い合わせが来ます。依頼者は若い方が多く、最近は書籍ではなくほぼWebページからです。毎日繰り返し変わらないページを見て、自らの判断でじっくり考えて来られる方が多く、こういう方は概ね間違いがありません。選ばれる我々建築家によっても施主の傾向があると感じます。もうひとつは、少数ですが建築プロデュース会社経由で来られる方です。いずれにせよ、仕事でも人間関係でもそうですが、リスクをとるかどうかで人間関係は濃くも薄くもなります。それによってできる建築の良し悪しは決まると言っても過言ではありません。

最初のヒアリングでは細かく聞かない

ヒアリングは事務所に来てもらいます。最初はお見合いみたいなものなので、あまり突っ込んだ話はしません。それでお互いやれそうだなと思ったら、まずは設計契約していただきます。そして、初回プレゼンテーションの後に契約を継続するかどうかジャッジしてもらいます。

ヒアリングでは土地の話や家族構成について尋ねたりはしますが、最初はその程度です。A4 1枚のフォーマットがありますが、そこに住所や家族構成、勤務先、予算についてなども記入してもらうようになっています。しかし強制ではありません。いちいち細かいことを聞かなくても何を書かないかでその人となりがよくわかります。つまり自分をオープンに晒け出せる人というのは、このプロジェクトは上手くいくと思わせる何かがあるのです。

土地や周辺環境を大切に暮らしをイメージする

希望があれば今まで建てた住宅を1、2軒一緒に見て

もらい、その建て主と話してもらいます。

土地と一緒に見に行き、現場で話をしたりもしますが、私は施主がそこでどんな暮らしをしたいのか、ということには正直あまり関心がありません。それよりも、その土地や周辺環境に人は生かされると思っていて、そのことより大きなことはないと思うのです。とはいえ、その人や家族、表情や言葉などをよく観察し、そこでの暮らしのイメージを徐々に膨らませて一案作ります。最良の案を提案し、だいたいそれで進むことにはなりますが、それで上手くいかなければ辞退することにはしています。

施主、施工者、設計者「三方よし」を継続

基本図面はもちろんですが、模型も作りますし、最近ではCGレンダリングも作成します。こうすることによって曖昧な部分を極力少なくして施主の理解を得られるようにしています。昔は少々理解不足でも「お任せください」という感じがありましたが、今はなるべくリアルに感じてもらうよう努力をしています。

時代の変遷とともに、高い確度での説明責任が求められるようになってきました。図面も昔は「細かい寸法は現場に入って決めればいいや」と見積もりも鷹揚でしたが、現代では徐々に許されなくなってきています。それで一念発起して図面やプレゼンの精度を高めていますが、今のところは施主や現場にも、結果的に自分にも良い効果を与えているのではと感じています。

結局のところ、施主には「やはりあなたに頼んでよかった」、施工者には「苦労はあったが関わってよかった」、我々設計者も責任が果たせるということで、継続性のある「三方よし」とならねばならないと思っています。



茅ヶ崎市にて現在設計中の住宅室内のCG

土地の潜在的なポテンシャルを調査

1976年愛媛県松山市生まれ。1999年東京大学建築学科卒業。2001年東京大学大学院修士課程修了。
2001～2006年伊東豊雄建築設計事務所（主にヨーロッパ・シンガポール等の海外プロジェクトを担当）。
2007年～末光陽子とともにSUEP設立。2011年より同代表取締役。

SUEP.
末光弘和



テーマを掲げ、共感してくれるクライアントと繋がる

独立して事務所を構えてから10年近くになる。住宅の設計に関して、独立当初はWebサイトから飛び込みで依頼されることが多かったが、最近は紹介での依頼の割合が増えてきている。また、独立以降、私たちの事務所では「環境」という設計のテーマを掲げているため、クライアント自身が、建築のデザインだけでなく、地球環境に何らか配慮した建築に興味のある人が増えていることも1つの傾向である。紹介が増えてきているのは、設計者を探しているクライアントがはっきりしたテーマを持っており、知人を介してそのテーマとマッチした建築家と繋がる傾向にあるのではないかとも思っている。飛び込みで来るクライアントは、コンペ的に他社と比較したいという方が多いが、本当に私たちの思想に共感し、私たちのデザインを望んでいるのか、それともただアイデアを比較したいだけなのかを見極めて、受ける受けないを判断するようにしている。

クライアントの声+土地からの声をキャッチする

住宅を依頼してくれるクライアントは、東京に比べて、地方からの依頼の割合が多い。これは、私たちが東京と福岡の2拠点で活動していることとも関係していると思う。「環境」に興味のある方は、自然豊かな場所で自然との関係を重要視して住まいを建てたいと思う人が多く、必然的に地方になるのかもしれないが、地方にも拠点があることで依頼の幅が増えやすいのかもしれない。

ヒアリングは、可能な限り現地に赴いて行うようにしている。それは、私たちの意向として、クライアントの要望を聞くだけでなく、現地の土地からの要望を肌で感じたいからでもある。現況の住まいは、可能な範囲で見せていただくくらいにとどめている。それはプライバシーの問題もあるが、クライアントと設計者の両者が、お互いに現況に引っ張られすぎないようにした方が、新しい暮らしをイメージしやすいことが多いからでもある。

環境リサーチによるポテンシャルの把握

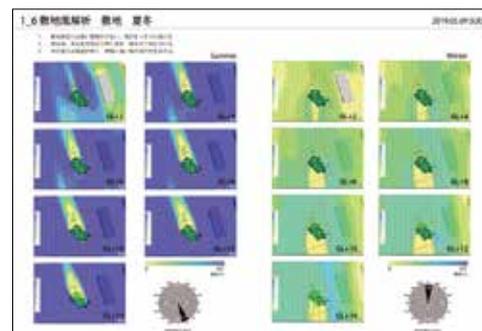
私たちの事務所では、最初に敷地の環境リサーチを行う。現地で実測によるリサーチをし、さまざまなデジタ

ルツールを使って、敷地の熱環境、風環境における特性を理解し、その場所でも有用な潜在的な自然エネルギーを調査する。また、同時に所内ではコンピューター上での解析を進め、気象データの分析はもちろん、数キロ四方の広域の地形をモデリングし、卓越風を利用してCFDによる風解析を行い、年間の風の流れ方を把握したり、周辺建物をモデリングして、年間の太陽の軌跡から日の当たり方や影のつき方を把握したりする。

気象解析では、年間でどの季節は自然通風が有効で、どの面にどのくらいの開口を設けると消費エネルギー削減に効果的かなども、独自のプログラムを通して理解するようにしている。これらリサーチ結果をまとめて環境リサーチレポートを作り、プレゼン時にデザイン提案を合わせてクライアントに見せるようにしている。

デジタルツールを積極的に用いてイメージを共有する

プレゼンテーションは、模型と3Dのイメージの両方で行うことがほとんどである。最近では、動画を用意して、専門でない人でも空間を理解しやすいように心がけている。特にこだわりを伝える場合は、VRなどを用いて説明し、それを理解してもらうこともある。3Dのデータを持ち込んで、その場で会話をしながら、色や寸法などのデータを調整し、コミュニケーションをとることも多い。また、デザイン提案の前に、前提条件の整理として、前述した環境リサーチレポートを説明するようにしているが、その際に影のつき方や風の流れ方などのシミュレーションを動画で見せることも多く、住まい手にも実感を持ってその場のポテンシャルを共有してもらうようにしている。



敷地風解析

設計前の「お見合い期間」で施主を理解する

1971年東京生まれ。1994年日本大学芸術学部卒業。同年、(株)横河設計工房へ入社。2000年(株)若原アトリエを設立。2004年～目黒区美術館ボランティア建築班。2016年～一般社団法人 東京建築アクセスポイント理事。2018年～エコハウス研究会理事。2019年～日本大学芸術学部准教授。

若原アトリエ
若原一貴



契約前、設計の話は抜きに何度も会う

私の事務所では、これまで新築住宅を年間に4～5件ほどのペースで進めている。新たな仕事のきっかけは、ホームページやFacebookなどを通じてメールにて依頼が来ることもあれば、知人や工務店の紹介などの場合もある。これらがすべて仕事に結びつくわけではないが、こうしたきっかけから実際に会って話をすることが新たなプロジェクトに向けての第一歩となる。

家づくりには施主と設計者、双方の「相性」が最も大切な要素である。新たな施主とこれから長い時間を一緒に共にするためには、契約前に十分な時間をかける必要がある。そのため、私の事務所では「お見合い期間」として初回面談以降、2週間ごとのペースで5回ほど会う時間をいただいている。その間は設計の具体的な話はしないし、プランの提案も行わない。ほとんどが雑談の時間となる。会話の内容は本や映画の話から、旅行の話や趣味のことなど普通の会話が続く。また、打ち合わせの場所もできるだけ事務所以外で行う。気になるカフェがあればそこで話をしたり、一緒に美術館や博物館へ出かけたりする。季節がよければ町歩きも良い。先方のお宅にお邪魔することもある。そのようにさまざまな場所で会うことで会話の幅も広がり、お互いの「人となり」がよりよくわかってくる。そうした時間を積み重ねることで、徐々に新しい家のイメージが湧いてくる。その後、具体的な設計案のプレゼンテーションを行うこととなる。

予算計画表を共有することが肝心

プレゼンテーションに用意するものは、手書きのスケッチ図面と1/100スケールの模型、予算計画表。この段階で案がよければ設計契約を行う(もし違うと思えばここまでの経費として10万円をいただき終了となる)。きちんと「お見合い期間」を経た場合であれば実際にプレゼンテーションをして断られることはほぼない。ここまで辿り着くのはだいたい全体の3割程度である。

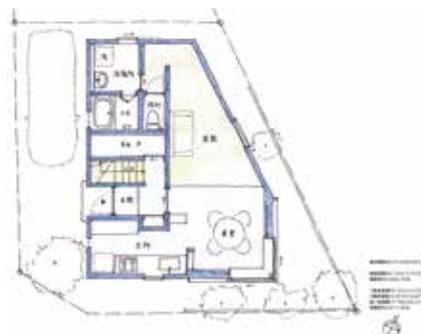
具体的なプレゼンテーションの中身について、大切なのはプランはもちろんだが、「予算計画表」が一番肝心だと考えている。設計契約後はこの「予算計画表」に沿って

その後の家づくりを行う。内容は「本体工事費/付帯工事費/外構・植栽計画費/置き家具・ブラインド予算/設計料/申請手数料」といった項目である。金額は事務所の過去のデータと経験値をもとにした「想定金額」ではあるが、施主と設計者の「共通認識」としてこうした予算表を作成し、それをもとに打ち合わせを進めてゆく。具体的な見積もりが出てきた段階で情報を更新するので、施主にとって常に「事業全体の予算」を把握することができる。想定予算からオーバーすることはもちろんあるが、その原因を共有でき、お互いに納得しながら家づくりが進められるのである。この予算表は初回プレゼンテーションから引き渡しまでに4～5回ほど更新される。

置き家具も建築の一部として予算を提示する

さらにポイントとしてはこの予算表の中に「置き家具」の費用を見込んでおくことである。これは主にダイニングテーブル、椅子、ソファ(ベンチ)などの予算である。私は「家具も建築の一部」だと考えているので、こうした予算を初めから確保しておくことで家具の提案をスムーズに行うことができる。完成した住宅により心地よく快適に住んでいただくための大切なポイントである。

施主との出会いはさまざまだが、長い時間をかけて家づくりを行うなかで、専門家から発信するだけの一方的なコミュニケーションとならないように気をつけている。特に限られた予算をもとにどのような考え方でそれを配分し、最終的なかたちとするのかを途中段階でありながらも共有することが大切である。そうすることで完成した住まいに対する住み手の理解度が深まり、その結果として永く大切に住んでいただけるようになるのではないだろうか。



「清瀬の小住宅」
初回プレゼンテーション
時の図面

プレゼンテーションまでの3つの流儀

1974年東京都生まれ。1997年東海大学工学部建築学科卒業。1997～1999年東京工業大学塚本由晴研究室 研究生+アトリエ・ワン。1999～2004年手塚建築研究所。2004年鍋島千恵とTNAを設立。東京大学大学院 工学系研究科建築学専攻博士課程修了、博士(工学)。現在、京都工芸繊維大学 デザイン・建築学域 特任教授。

TNA
武井 誠



私たちが最初に依頼された住宅の設計は、前職の設計事務所でお世話になった工務店からの紹介で、今でいう「デザインビルド」のような、施工会社と一緒に設計をするというものだった。「デザインビルド」というと、実際に完成したときにはオリジナルの設計案とは変わるのには不思議ではないが、幸運だったのは私たちが提案する意匠について、工務店は一切口を出さなかったことである。クライアントが設計に満足する姿を見ると、多少納まりが難しくても、人工^{にんく}がかかっても、とことん付き合ってくれた。今思えば、クライアントからの信頼と作り手のプロ魂が、独立したての私たち創作意欲をさらに掻き立てたのかもしれない。独立して15年が経ち、いつも素晴らしいクライアントに恵まれ、建築の設計にたずさわれていることは本当に幸せなことである。

私たちは、事務所を始めた当時からずっと変わらない、最初のプレゼンテーションに至るまでの3つの流儀がある。

1つ目は、敷地を見ない限り設計を始めない。クライアントはまず敷地図面を見せてくれるが、それはあくまでも図面であり、地面も空もなければ、音も匂いもない。敷地に行って初めて、建築がそこに建つ意味を考え始めることにしている。そのせいか、「敷地が魅力的で、思わず購入してしまったのだけれど、普通に建てたら難しいのは分かっている。どうしたらよいか分からない。自分たちが選んだ敷地の魅力を一番際立たせるような家を設計してほしい」という要望も多い。確かに現地を訪れると、不思議な魅力を放っている場所だったりする。建築はその場所や環境をより豊かにできなければ、自然のままの方が良いに決まっている。だから、私たちは、敷地と一緒に選んでほしいという依頼には、「自ら選んだ敷地を教えてください。その敷地で私たちは設計します」と答えることにしている。敷地が決まっていなくて建築のアイデアは浮かんでこない。そのくらい敷地が一番大事な設計条件なのである。

2つ目は、住宅設計の場合は、最初の面談の時にご夫婦で出席していただく。これは、奥様が専業主婦の場合、

家に一番長く居る、いわば家の番人の意見は大事だからである。住宅だけでなく、建築はその寿命の中で、クライアントとの設計期間よりも、完成してから利用者が使う時間の方が圧倒的に長い。設計段階の細かい要望を聞く前に、将来へ向けた使い手の価値観を共有する必要があるのだ。ちなみに、自宅の設計で反対の意見だった夫婦が、設計者の目線から質問をすると実は目的は同じ方向を向いていたりすることに気づいたりするから面白い。事務所に来てから夫婦の会話が増えたというのは本当の話。

3つ目は、クライアントが何に興味があるか、何を望んでいるのかを直接会って推測する。ここで、設計者から質問をしてはいけない。なぜならそれが本心かどうかはまだ分からないし、建築家に設計を依頼すること自体が大きなハードルだとしたら、こちらに気を遣っているかもしれないからである。聞こえない声に時間をかけて耳を傾けること、それには観察力が大事である。例えば、設計の依頼のきっかけが手紙なのかメールなのか電話なのか、どれが一番良いとは言えないが、そういったところにクライアントの価値観の違いが出るのである。

そして、いよいよプレゼンテーション当日。私たちは基本的に模型を1/100スケールにしている。住宅であれば必ず。そして、敷地周辺の30m程度までの建築物のボリュームをきちんと表現し、まず周辺がどのような環境なのかを知っていただく。それから、敷地に載せた状態の建築を周辺模型の中に置くことにしている。クライアントはそれが敷地に置かれた瞬間、街の中で、あるいは自然の中でのその建築のかたちの意味に気づく。それがクライアントにとって大きな発見になればと思っている。だから、私たちはあまり最初の模型にリアルな素材を使わない。色は真っ白。そこにあらかじめ私たちの色を付けたくないから。

手のひらサイズの模型を夜な夜なベッドに持ち込んで、眺めてほほえむクライアントの姿を想像するのが、私たちのプレゼンテーション後のいつもの楽しみである。

今号から3回にわたり、「SDGs」について連載します。初回の今回は、国連でのSDGs制定から日本の建築分野における動きを、日本建築家協会 六鹿正治会長に、SDGsのわかりやすい説明を国際担当理事 高階澄人氏に執筆いただきました。

『SDGs建築ガイド日本版』から SDGs建築フォーラムへ



日本建築家協会会長
六鹿正治

国連SDGsは社会と建築家をつなぐ共通語

『JIA MAGAZINE』に何回か書きましたが、2015年に国連で採択されたSDGsは、社会の「持続可能な開発目標」として2030年までに世界中で達成すべき17のゴールを掲げています。それらは先進国も発展途上国も共に取り組むべき普遍的な目標であり、「地球上の誰一人として取り残さない」ということを目指しています。日本でも国の各省庁をはじめ多くの自治体や企業が積極的に取り組みを進めています。

まずJIAの建築家の皆様には、この急速に社会に広がりつつあるSDGsの動きの広範さに注目していただきたいと思います。すなわち、すべての分野の人々がSDGsという共通語を使って社会の発展や開発の方向性についてコミュニケーションし始めたということです。それはまた国内にとどまらず、世界中の全ての分野の人々との共通語になり始めているともいえるのです。

『SDGs建築ガイド』

そんな中で、UIA（国際建築家連合）とデンマーク王立芸術アカデミーとデンマーク建築家協会の人々が『SDGs建築ガイド』を2018年末に刊行しました。これは「建築はSDGsのために何ができるか」を17のゴール別に事例をあげて解説したものです。このUIA版はなかなかよくできたガイドなのですが、残念ながら日本の建築が事例として1つも入っていません。編集に携わった人々が日本の建築をよく知らなかったのでしょうか。ならばいつそのこと、日本の建築家が設計した日本国内の建築を事例として、日本人のための「建築はSDGsのために何ができるか」について解説した本をJIAでつくったらどうか、ということになりました。それが『SDGs建築ガイド日本版』です。

3月に理事会決定をして編集執筆のための特別委員会を立ち上げました。特定の分野に偏らず広くJIA全体をカバーすることを象徴的に表せるように、全常置委員会の委員長に特別委員会の委員になっていただきました。

その上で事例案の推薦で全国の各支部長や全国会議議長にも協力を要請しました。

作業のかなり初期から、いやJIA編の日本版は日本人のためだけではなく、日本の豊饒な建築文化を通じて建築とSDGsの関わりを世界中に発信できるものにしたという思いが募りはじめました。そして完全和英併記でつくることになったのです。

『SDGs建築ガイド日本版』が出た

そして本当に多くの人々の献身的な努力のおかげで、遂に10月初めに『SDGs建築ガイド日本版』が刊行の運びとなりました。皆様のお手元にはもう届いているでしょうか。

国連SDGsの17のゴールごとに、建築や建築環境がそのゴールの達成について何ができるかが解説されています。そして1つのゴールにつき3つの建築事例が挙げられていて、それぞれどういう課題（Challenge）に答えようとしているか、どのように課題解決に貢献（Contribution）しているかが解説されています。

もとより、建築や建築環境だけでSDGsが達成されるわけではありませんが、他の分野との連携・協力の中においても、建築や建築環境が果たす役割が大きいということを確認されることと思います。

なお、注意しておかなくてはならないのが、国連SDGsの簡潔に書かれた17のゴールは「見出し」のような役割であり、その字面のみでは理解不足や誤解に陥る場合があることです。その下にそれぞれ約10項目定められているターゲットを知ることも課題や貢献の理解に必要な場合があります。

SDGsと日本の建築

日本版とUIA版を比べて思うのは、国により地域によってSDGsのゴールの社会的な意味や受け止められ方、達成度、優先順位などが大きく異なるため、選定事例の組み合わせに独特の個性があるということです。3事例

ということに限定しなければ、さらにゴールが示すものの広がりを実感できるかもしれません。あるいは、知っている建築の中から、あなた自身の3事例を見つけてみるのもいいでしょう。

一方で、各建築家や注文主に今回の掲載許諾をいただく際に、躊躇や拒否をされた場合があったことも記憶に鮮明に残っています。特定の1つのゴールの事例として選定されることの可否が判断しにくかったためと思われる。確かに、17のゴールのどれか1つにしか貢献が該当しない建築というのはめったにありません。いくつかの建築のSDGs達成への貢献をマトリックスにして分析してみるのも勉強になるかもしれません。

日常の活動からSDGs建築フォーラム2020へ

『SDGs建築ガイド日本版』を使いながら、それぞれの地域や職域で、建築とSDGsについての認識を深めるさまざまな活動を行うことができます。建築家仲間勉強会をやったり、新しくできた建築の見学会のあとで

SDGsの視点から議論したり、いろいろな展開が考えられます。そしてもっと大事なのが、市民や企業や行政と共同で建築SDGsワークショップなどを開催して、建築家と社会のつなぎ目をより強くしていくことです。

そして、そういうふだんの建築とSDGsをめぐる多様な活動の緩やかで大きなうねりの先に、それらの活動のネットワークとして、企画の始まった「SDGs建築フォーラム2020(仮)」を捉えていきたいと考えています。

■『SDGs建築ガイド日本版』に頻出する単語

和英完全併記ですので、頻出用語に注目するとSDGsの本質にもっと迫ることができるかもしれません。

resilient (レジリエント)：回復力がある、立ち直る力がある、粘り強い、強靱な

inclusive (インクルーシブ)：包括的、誰でも受け入れる、排他的でない

affordable (アフォーダブル)：手の届く価格の、安価な、手頃な

sustainable (サステナブル)：持続可能な

built environment (ビルト・エンヴァイロメント)：建築環境、手を入れていない自然環境に対して建築環境

国連SDGsについて

—地球上におきている課題を
自分のこととして捉える—



国際担当理事
高階澄人

SDGs(エス・ディ・ジズ)という言葉がメディアに現れるようになって数年が経ち、この1年ほどの間にはさまざまな分野における取り組みの紹介などが数多く見られるようになってきています。

一方、2019年2月に電通が行った全国6,576人を対象としたSDGs認知度調査の結果では、その認知度は前回より1.2ポイント増えたものの平均16.0%(男性20.5%、女性11.6%、学生24.8%)にとどまっています。政府広報「ピコ太郎×外務省」(SDGs/Public Private Action for Partnership)のYouTube視聴回数も、2年間で31万回と、オリジナルPPAPの8600万回に比べて振るいません。2018年の別調査による世界の20カ国・地域におけるSDGs平均認知率51.6%に比べ、日本の認知率の低さは際だっています。

「SDGsという言葉は知っているけれど詳しい内容についてはちょっと…」というJIA会員に向けてわかりやすい説明を、という広報委員会からの依頼を受けてSDGsについてのごく基本的な解説をします。

まず、国連のサイトではSDGsの目的について下記のように説明しています。^{*3}

SDGs「Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)」とは、全ての人々にとってよりよい、より持続可能な未来を築くための青写真です。貧困や不平等、気候変動、環境劣化、繁栄、平和と公正など、私たちが直面するグローバルな諸問題の解決を目指します。SDGsの目標は関連しています。誰一人置き去りにしないために、2030年までに各目標・ターゲットを達成することが重要です。(国連広報センターHPより引用)

次に、日本の外務省のサイトにはSDGsの経緯と先進国としての方針が示されています。^{*4}

SDGsは2001年に策定されたMDGs(ミレニアム開発目標)の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、発展途上国のみならず、先進国自身が取り組む普遍的なものであり、日本もこれに積極的に取り組んでいます。(外務省HPより引用)

17の具体的な目標(ゴール)は下に示されるように、カラフルなアイコンにより誰にでもわかりやすくビジュアルに訴求されています。

はじめの6つのゴールは、貧困や飢餓、健康と教育、安全な水、など主には開発途上国のみを対象としているように見えますが、「子供の貧困」や「ジェンダー平等」など、日本のゴールとしても当てはまるものも含まれます。次の7~12のゴールはクリーンエネルギー、経済成長、技術革新、まちづくりなど多くの先進国に共通する課題に対する目標と言えます。もちろんその全てが日本も達成すべきゴールに当てはまります。最後の13~17のゴールは気候変動、豊かな地球生態系の保全、平和と公正、パートナーシップなど全地球全世界を包括する目標です。

目標に掲げられる項目、たとえば「水」「教育」「産業」などの世界各国における現状レベルには当然のことながら格差があり、また「貧困」「不平等」などをもたらす原因もさまざまであるため、同じゴールであっても国や地域により直面する課題もその解決策も大きく異なります。SDGsの優れたところは、それらをすべて包括するよう普遍的な目標を示すと同時に、極めて具体的な「事実と数字」を掲示しているところです。世界レベルでの視点をもって地球の課題を捉えつつ、それぞれの地域の問題に向き合う、といったような態度を地球上のすべての人々に促すシステムとなっているのです。

平易な言葉で表すと「地球上におきているあらゆる課題を、ひとりでも多くの人が自分のこととして捉え、その解決に向かって行動するための目標を示す」ことがSDGsのメインコンセプトであると思います。

17の「目標／ゴール」はその下に169の具体的な「達成基準／ターゲット」を伴い、さらに効果を測定するための232の「指標／インデックス」が設定されていることから、SDGsは大きく3層の構成となっています。ここですべての階層と項目を示すことはできませんが、外務省のウェブサイト「SDGグローバル指標^{*5}」としてゴールごとに検索できるようにまとめられています。

都市・建築環境に関わる建築家にとって、SDGsは業務上の指標や目標、また社会との共通言語ともなる普遍的で重要な視点といえます。ひとつの建築だけで地球規模のゴールを解決することが難しいのは明らかですが、人々の生活の器を扱う職能であるからこそ私たちは日々必然的にSDGsの複数のゴールに同時に関わっています。またビジネスの世界ではESG (Environment, Social, Governance) という指標があり、同じ「持続可能な世界の実現」をSDGsと双輪となって支える動きが世界のトレンドとして加速していることも、建築界としては見逃せません。この『Bulletin』の特集と『SDGs建築ガイド日本版』の刊行を機会に、SDGsの視点からご自身の携わっているプロジェクトとその周辺環境を眺めてみてはいかがでしょうか。

- * 1 第2回電通SDGs生活者調査 <https://dentsu-ho.com/articles/6615>
- * 2 PR動画「ピコ太郎×外務省」
<https://www.youtube.com/watch?v=H519RHeAT10>
- * 3 国際連合広報センター「SDGsとは？」
https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/31737/
- * 4 外務省「持続可能な開発目標とは」
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html>
- * 5 外務省「SDGグローバル指標」
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/statistics/index.html>

(SDGs 17のゴール (開発目標))



ノマディック・ルーフを港湾緑地へ



JIA 神奈川
若手建築家
+ 法人協力会
プロジェクトリーダー
小山将史

6月7日から16日までの10日間、横浜・象の鼻テラスで開催された象の鼻テラス開館10周年記念企画「フューチャー・スケープ・プロジェクト」に、JIA神奈川の若手建築家+法人協力会のメンバーで、ロフト付き可動式テント「ノマディック・ルーフ」を製作して出展しました。

ご存知の方も多いと思いますが、象の鼻テラスと象の鼻パークは横浜開港150周年記念事業として、横浜港発祥の地を、横浜の歴史と未来をつなぐ象徴的な空間、文化観光交流拠点として、小泉アトリエの設計で2009年6月に完成した休憩所と港湾緑地です。そして、このプロジェクトは、象の鼻テラスと横浜市が共催したもので、1年後、10年後、100年後を想像し、さらに居心地の良い、快適な場所にするアイデアを集め、みんなの夢の詰まった「未来の風景」として出現させるアートプロジェクトで、この機会に市民と一緒により良い公共空間の使い方を提案したいという趣旨に我々も賛同して参加しました。

JIA神奈川としても、公共空間の使い方への具体的な提案をする初めての試みということで、期待と不安が入り交じりながら開始したのを覚えています。

具体的には、抛り所のない港湾緑地にひとつの大きな屋根を設けて、日除け兼雨避けを作り、浜風を感じられる半屋外空間ができ上がりました。木軸とジョイント金物とワイヤーをバランス良く組み合わせることによって、通常のテントよりも強く、潮風の影響を受けにくい安定した構造です。今後もう少し改善も必要ですが、可動式で、折り畳みが可能な骨組みです。計算上は10m角まで可能ですが、今回は仮設建築物の要件の関係で、5.4m×5.4mの大きさにしました。大空間を生み出すため、屋根はテント膜で軽量化し、2枚の布を重ね合わせ



最終日のクロージングパーティーの様子

ることで風が抜ける心地良さを醸し出しました。

また、大きな特徴としては、木軸があり、通常のテントにはないロフトを設けることができます。これによって、上は寝室、下はリビングといった立体的な使い方もでき、特に夏場の仮設住宅等、災害時の活用も可能です。

予算ゼロからのスタートでしたが、JIA神奈川法人協力会や協賛企業から、また初の試みとしてクラウドファンディングからの支援もあり、何とか製作して展示することができました。

このイベント参加の主な目的は、第1に公共空間の使い方の提案、第2に法人協力会等との関係性の強化、第3に若手建築家の入会促進でした。梅雨で苦戦する日もありましたが、イベント期間には多くの来場者に恵まれ、また、法人協力会等との共同作業は一体感を生み、第一と第二の目的はかなり手応えを感じました。一方で、第三の目的はまだこれからといった感じで、今後の受け入れ態勢強化と広報次第なのではと思いました。

JIA神奈川に限らず、業界全体として、次の世代が魅力やメリットを感じられるようにしたいと思うとともに、魅力ある活動には積極的に汗をかきたいと思っています。



ノマディック・ルーフ外観



ノマディック・ルーフ内観



ノマディック・ルーフ夜景

海外アワードでつかんだ手応え



家所亮二

六本木に「ニクノトリコ」という焼肉店がある。
現在世界中で14の賞を受賞している私の代表作だ。

独立して2年目のある時、スタッフが急に辞めた。すぐに替わりは見つからず、クライアントにも迷惑がかかり、解約案件も出た。

評価されるものを作り、事務所を大きくしていくことは無意識のうちに頭にあったが、そもそも何のために大きくするのか？ 大きくすると何が起こるのか？ それは目的になり得るのか？ と意識するようになり自問し続けた。そして、自分のエゴよりも、まずはせっかく求めてくれたクライアントにきちんと向き合い、120%応えていこうと決めた。

以後スタッフを雇うことをやめ、必要な時に協力事務所に外注する体制を構築していった。数千㎡の案件がある今でもそれは変わらない。

そんなある時、同年代のデザイナーたちが海外のアワードを取っていることを知った。海外のアワードを取ることなんて考えもしていなかったが、1件1件じっくり丁寧に作り続けていた自分としては、取れるのではないかという感覚があった。

自分のデザインや伝えたいことが評価されることは、これまでのクライアントのためにもなる。そして自分の作るものへの信頼につながることは、これからのクライアントのためにもなると考え、2016年末に完成した「ニクノトリコ」ではじめてエントリーした。



FRAME Awards 2018

FRAME Awards 2018の会場

まずミラノのA'DESIGN AWARD 2017に応募すると、いきなりGOLDを受賞した。続けざまに、LAのINTERNATIONAL DESIGN AWARD 2016もGOLD、NYのAMERICAN ARCHITECTURE PRIZE 2017でもWINNERに。授賞式はSANAA設計のニューミュージアムのスカイルームで行われた。土日は開放される場所だが夜はなかなか入る機会はない。この時の夜景は特別なものとして心に刻まれた。ちなみに私は船木幸子氏の事務所出身、船木氏は妹島和世氏の事務所出身なので、不思議な巡り合わせを感じた。

続くロンドンのRestaurant & Bar Design Awards 2017ではショートリスト止まりだったが、隈研吾氏や藤本壮介氏も受賞に届かない、レベルの高いアワードだった。国内では、JCD design award 2017でSILVER、BAMBOO AWARD 2017でGOLDを受賞して2017年は終えた。

年が明けると、早々にFRAME Awards 2018のショートリスト(トップ5)ノミネート作品が発表された。前年に雑誌で取り上げてもらった関係でインビテーションが届き、3部門にエントリーしたところ、そのすべてでノミネートされた。1,000点弱もある中から選ばれた作品には、OMAやMVRDV、RCR architects、Neri & Huら超有名どころを筆頭に、海外アワードの常連がズラリと名を連ねていた。日本からも長谷川豪氏、Onndo、Nendoら錚々たる面々が集まったアワードは、さすがオランダのデザイン誌『FRAME』が主催しているだけある。

自分のあこがれだったMVRDVと競合することになったのだが、信じられない気持ちを嘸み締める間もなく、彼らが見事にさらっていった。同じ作品で3部門ノミネートされたのは自分だけだったため、どれかは勝てるのではないかという妙な自信があったが、結局3部門とも審査員の評価はもらえなかった。それでも2部門は一般投票で決定するPEOPLE'S CHOICEに選ばれた。数人の審査員より多くの一般の方の支持を得られたのは誇りに思う。なによりここまで来られたという自信と、トップを取れなかったことによる悔しさは、これまで設定す



「ニクノトリコ」1階



「ニクノトリコ」2階

ることすらできなかった位置に目標を掲げられる素晴らしい機会となった。

それから程なくして、世界三大デザイン賞のひとつIF DESIGN AWARD 2018でもWINNERに。この受賞がミラノサローネでRossana Orlandiのギャラリーから出展する決め手となった。

彼女のギャラリーは独特で、目利きらしいアートピースのような家具や照明、雑貨が良い意味で雑多に展開されている。実は出展が決まる3年くらい前、当時何の実績もない自分は無謀にもアプローチしたが、当然取り合ってもらえなかった。しかし、受賞が続いたタイミングでそろそろやってみる？と声がかかり、家具の実績のなかった自分がミラノで、しかも深澤直人氏や長坂常氏のアイテムを取り扱うほどの超有名ギャラリーで家具デザイナーデビューしたのだ。

ミラノにいた時には、あのCNNが記事にしてくれた。Designboom、ArchDaily、dezeenといった大きなWebメディアからもオファーが相次いだ。

海外の賞は自分を想像していなかったところに連れて行ってくれる。当初はここまで世界中の賞

に通るとは思っていなかったし、ここまでのことが起こるとも思っていなかった。

「ニクノトリコ」は、この2年で延べ17のアワードにエントリーし、14ものタイトルを手にした。残る3つのうち2つはショートリストだったので、まったく引っかけなかったのはたったの1つだけである。ここまでの数をここまでの確率でなんてことは当然想像しておらず、気づけばこの短い期間で行動も目標も大きく変わっていった。今ではNY事務所の開設を目指している。

より多くの人に、より加速度的かつ高効率に、デザインはもちろん、その背景にある想いや伝えるべきことをきちんと伝えていきたい。特に最近のデザインの多くは本質的でなく表層的、そして商業的すぎる、ツール化しすぎているように見える。インターネットの影響も大きいと思うが、それは日本人としてというアイデンティティや、伝統、ものづくりなど、失ったら取り戻せない、失ってはいけないものを危機にさらしている気がする。これは何としても食い止めなければならない。

そしてもうひとつ、海外に拠点を持つことで世界中の美しい自然や街、建築、デザイン、文化などを息子と見て回りたい。もちろんインプットになるとも思っているが、好きなことや、自分や家族の人生を豊かにすることも同じくらい考え、大事にしていきたい。



ミラノサローネ
Rossana Orlandiの
ギャラリー

家所 亮二 (いえどころ りょうじ)

家所亮二建築設計事務所 代表

1977年横浜市生まれ。
2012年にHOUSE PLACE ARCHITECTURE associationを設立し、2014年株式会社家所亮二建築設計事務所に改組。建築から家具、インсталレーションやアートなどスケールやジャンルを問わず、“ありそうでなかったモノやコト”、“ヒト独自の本能や感覚、感情”にフォーカスし、ヒトの意識や考え方を豊かにしていく表現を目指す。主な作品に「ニクノトリコ」「E Office」「MOMENT KANDA」「ma ku」「wa ku」「Arrow →」「ピースハウス」など。

中村好^{よしふみ}文氏に聞く 自分らしく 住宅と家具にこだわり続ける

住宅を数多く手掛けてこられた建築家・中村好文さんに、クライアントとの打ち合わせの進め方や、住宅、家具に対する思いやこだわりなどをうかがいました。また、今号の特集：建築ウォームアップでも取り上げている、設計の導入部分についてもお話いただきました。



—今メインでやられている仕事はなんですか。

住宅設計がほとんどですが、ここ数年、新築の住宅だけでなく、伝統的な町家や古い民家を改修する仕事が増えています。新築と違って改修の仕事は不測の事態が続発しますが、そういう時に臨機応変に対応するデザインの反射神経が要求されます。クラシック音楽の演奏というよりジャズ・セッションのように、アドリブ的に当意即妙に対処していくところが改修仕事の醍醐味ですね。それから今は、住宅以外の仕事で、キリスト教のチャペルや、こども園(保育園+幼稚園)や、美術館の計画などにも取り組んでいます。

大学2年生のころから住宅設計と家具デザインを自分のライフワークにできたらいいなあと考えていました。これといった理由があったわけではないのですが、ビッグプロジェクトではなく、住宅と家具ぐらいが自分の身の丈に合っているし、そういう仕事をしていけば背伸びをしないで自分らしい生き方ができるだろうと漠然と考えていたんでしょうね……で、ふと気がついたらそうなっていました(笑)。

—仕事の依頼はどういうきっかけで来るのですか。

著書を読んで依頼してくれる方が多いですね。本の内容に共感してくれたり、著者のぼくになんとなく親近感を抱いてくれたりした上で連絡してくれるので、どことなくぼくと似たタイプの人が多いような気がします。依頼してくれる方は20代後半の年若いご夫婦から年配の方まで幅広い年齢層です。著書といえば、15年ほど前、女優の檀ふみさんと対談したことがあるんですが、そのとき檀さんが「中村さんはホンカク建築家ですよ」と言いました。ぼくはそれがなんのことか分からずポカンとしていたら、檀さんが即座に悪戯っぽい目つきで「本、書く、建築家でしょ?」と言いました(笑)。先日数えてみたら、これまでに出版した著書がいつの間にか20冊近くなっていましたから「本、書く、建築家」という肩書きはあながち的外れではなくなったような気がします。

文章は40代の半ばからポツリポツリと書き始めまし

たが、書き始めたときから、建築家にありがちな難解な文章やひとりよがりの文章ではなく、だれが読んでも分かる平易な文章にしようという肝に銘じていました。書くべき内容さえしっかりあれば、書きようはあるはずだと……。井上ひさしさんは「むつかしいことをやさしく」と言いましたが、文章を書く時はいつもこの言葉を脳裡に浮かべます。

—文章を書くことはもともと好きだったのですか。

いいえ、本を読むことは好きで10代の頃からよく読んでいましたが、原稿用紙でいうと20~30枚ぐらいの少しまとまった文章を書き始めたのは、雑誌『CONFORT』に連載していた「住宅巡礼」からです。文章を書きだしてみたら、はっきり好きな言葉や、好きな言いまわしがあつたので、自分に書くべきことや伝えたいことさえあれば、あまり苦勞せずに文章にすることができました。若いころからさまざまな文章に親しんでいたおかげで、自然に「自分の文体が身についていた」のかもしれない。本の内容だけでなく文章の呼吸、リズム、語り口などが自分の中にいつのまにか染み込んでいたんだと思います。

—設計するときは何から考え始めることが多いですか。

それはケース・バイ・ケースですね。敷地の形状がきっかけになる時もあるし、クライアントの言葉や人柄がきっかけになる時もある。他にもいろいろな要素が設計のヒントになりますから、「ここからスタートする」という決まりごとはありません。最初のヒアリングもお医者さんの問診的な形式ではなくて、クライアントとの雑談のなかから設計の手掛かりを見つけることが多いような気がします。クライアントには要望書を書いてもらうようにしていますから、それをだいたい頭に入れたら、あとはその要望書の行間を読みながら設計するという感じですね。クライアントとは一緒に食事したりお酒を飲んだり、ときには旅をしたりしますが、結局、そういう付き合いが一種の問診になっているのかもしれないね。

一見、設計とは関係のなさそうなお喋りからもクライアントの価値観や人柄はにじみ出るものですから。このクライアント一家は、こんな経歴で、こんな価値観を持ち、こんな感じ方や考え方をし、こんな暮らし方をしている人たちなんだなということを知ることによって「この人たちの住まいはどうあるべきか」と目指すべき方向、つまり設計の方針が見えてくるような気がします。そうしたお喋りを通じて信頼関係が結べて、クライアントには「この建築家に自宅の設計を任せよう！」と思ってもらい、ぼくは「この家族に相応しい住宅を設計しよう！」と意欲が湧いてきたら、あとは大体うまくいく……ような気がします(笑)。

—住宅にはどのような空間を求めていますか。

自分がそこにいたくなるような居心地のいい空間や場所をつくりたいと思っています。極端に言えば、住宅の価値はそうした居場所の数でも測れるような気がするからです。ただ、それを作り出すのはそう簡単なことではないですね。なによりも居心地に対する動物的なカンが必要です。論理や理屈からは居心地の良さは生まれませんから。ぼく好きな建築家は例外なくそうした居心地に対するカンの良さを備えていました。グンナール・アスプルンド、ルイス・バラガン、チャールズ・イームズ、アンジェロ・マンジャロッチェ、チャールズ・ムーア……彼らの設計した住宅や別荘を実際に訪れることで、ぼくはその居心地の良さをたっぷり味わわせてもらいました。

—家具もデザインされています。間取りから入り、だんだん家具など小さい部分を設計していくのですか。

いいえ、たぶん同時にしていると思います。基本設計の段階から、頭の片隅で家具のことを考えています。この家では家具はこうしたいという、ぼくなりの方針がありますから。そして作り付けの家具は毎回すべてデザインします。キッチンはその家に合わせてステンレスシンクに至るまでその都度デザインして特注製作しています。置き家具は既製品を使うこともありますが、自分のデザインした家具の定番が増えてきているのでその中から選んで入れることが多くなっていますね。僕にとっては家具をデザインするのも住宅を設計するのも同じ仕事で、あまり区別して考えていないんですよ。

—家具デザインはどこで学ばれたのでしょうか。

どこかで誰かに学んだわけではなく、古今東西の家具をつぶさに見ることや、実際に使うことで学んできました。学生時代は日本民芸館に通ってウィンザーチェアや



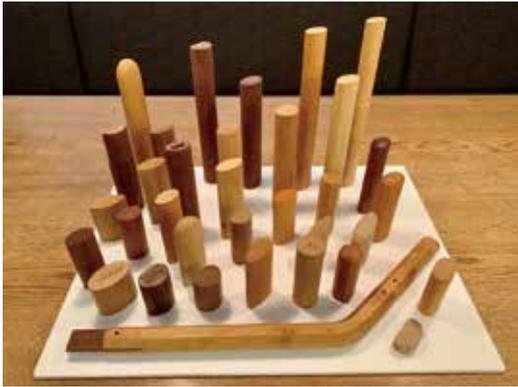
取材中にご自身で設計した別荘を案内してくださる中村さん。

李朝時代の家具など、手当たり次第にスケッチしました。20代の終わりぐらいからは、目白にある「古道具・坂田」という店で、イギリス、フランス、スペインの16～19世紀の古い家具を撫でまわしたり、実測させてもらったりして勉強しました。名作といわれる椅子は、その日暮らしの貧しい家計をやりくりして買い、身近に置いて使ってきました。

実務でいえば、大学を卒業して小人数のアトリエ事務所で働いた後、品川にある家具職人を養成する都立の職業訓練校に入り、鋸や鉋や鑿などの木工道具の使い方や、木工機械の操作、また、木材の性質など木工職人になるための基礎的なことについて学びました……といっても職人になろうとしていたわけではなく、そういう基本的なことを身につけた上で家具のデザインをしようと思っていたからです。訓練校のあとで吉村順三先生の設計事務所に入りました。学生時代から吉村先生の住宅が好きで、何回か入所希望の手紙を出したり、吉村先生に会いに行ったりしましたが、なかなか入れてもらえなかったんです。そこで、作戦を変えて正面玄関ではなく裏口のほうを狙って(笑)ですね、「吉村先生の下で家具デザインがしたい」と志願して入所できたのです。吉村先生は日本の建築家の中では珍しく家具のデザインができる建築家でしたけど、入所希望者に家具デザインがしたいという若者はいなかったんでしょうね。作戦はまんまと的中したわけです。結局、吉村事務所には3年半ほどいて、吉村先生の家具デザインの助手として、来る日も来る日も家具のデザインに明け暮れました。そのときの成果のひとつが八ヶ岳高原音楽堂などで使われている「たためる椅子」で、吉村先生と丸谷芳正さんとぼくの協働デザインです。

—やはり木の家具にこだわっていますか。

ええ、木製の家具に対する愛着と思い入れは強いですね。木材という、縮んだり、捻れたり、割れたりする性



これまでに製作した階段の手摺の「切り落とし」は、握り具合をチェックするサンプルとして保管しているという。「この倍ぐらいはとってあるかなあ」と中村さん。

質を念頭に置いて上手になだめつつ形にするところが面白いんですね。木の家具をデザインする人は木材というものを熟知していないとしっぺ返しを食います。木をねじ伏せることはできないので、木の性質に自分が寄り添っていかないとうまくいかない。ぼくは暖炉やストーブもデザインしていますが、これも燃焼の法則を無視したカッコだけのデザインでは成立しません。そもそもそういうカッコだけの代物はデザインという言葉に値しないのです。デザインという言葉は「理に適った形」という意味だと考えると、ぼくが言わんとしているニュアンスは伝わりやすいかもしれません。

— なかでも木製の手摺をととても大切にしていっていますね。

よくぞ、そこに気付いてくれました(笑)。住宅の部材のなかで階段の手摺ぐらいやり甲斐のある仕事はないと思うんです。というのは、握り心地が良くて、手触りの良い手摺はその家のシンボルになり得ますし、家に対する愛着を育んでくれるので、クライアントに手放しで喜んでもらえるからです。階段の手摺はそこに住む人が必ず握りますから、ぼくは手摺を通じて住み手のひとりひとりと握手する気持ちでデザインします。毎回、そこに住む家族のことを思い浮かべながら素材と握り心地を決めているんです。スポーツに熱中している元気な男の子がいるから檜材で少し太めで頑丈なものにしておこうとか、女系家族の家だから楓材で細身の優しい形にしようとか、そこに住む家族のことをあれこれ思い浮かべながら設計することは住宅設計ならではの愉悦です。もっともそんな風に、1軒、1軒、素材も形も違う手摺を作ることができるのは40年近く家具職人と二人三脚でやってきたおかげかもしれません。

なにをするにしても「ここでは、ああしよう」「ここでは、こうしよう」と、ひとつひとつのことについて設計



中村さんは家具だけでなく、食器などの小物も数多くデザインしています。左／卵形のゴマすり器(片手で握り、もう一方の手の平にすり棒をあてがって回す) 右／竹串を束ねて作った包丁差しの試作品。

者の気持がこもっていることが大切だと思います。出来の良し悪しはともかく、誰かが一生懸命やったことは、必ず人に伝わります。逆に言えば、お座なりにやったことも人には伝わってしまうということも忘れないようにしないとね。

— 最後に、住宅設計という仕事について、お考えをお聞かせいただけますか。

その質問のこたえになるかどうか分かりませんが、亡くなった林昌二さんがある対談のなかで「住宅を設計する人は暮らしの細部に興味がなければなんの面白みもない」「暮らしの隅々のことをキチンと温かく処理するところに住宅の面白さがある」と言っています。そして、ここからが極めつけの名言なのですが「一軒の住宅には世界が詰まっているんです」と続けています。「1軒の住宅に世界が詰まっている」というこの言葉に深く共感できれば、住宅設計の仕事はひとりの建築家が一生を賭けて取り組むに値する壮大なテーマだと思います。ぼくもそろそろゴールが見えてきましたが、住宅設計をライフワークにしようと思った初心を忘れず、もうひと頑張りしようと思っています。

— 貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

インタビュー：2019年8月17日 大磯の別荘にて
聞き手：長澤徹・会田友朗・中澤克秀(『Bulletin』編集WG)

PROFILE

中村 好文 (なかむら よしふみ)

建築家

1948年千葉県生まれ。1972年武蔵野美術大学建築学科卒業。宍道建築設計事務所勤務の後、都立品川職業訓練校木工科で学ぶ。1976年～1980年吉村順三設計事務所勤務。1981年レミングハウスを設立。1999～2018年日本大学生産工学部建築工学科教授。2014年～多摩美術大学客員教授。

先達から学ぶ



野沢正光

先達から学ぶことは、先達の作り出したたくさんの優れた先例を楽しむということに他ならない。実に多くの先達、たくさんの先例に学びそれらを楽しむことは何よりの至福である。作るということの前には必ずこのことがある。何を学び何を楽しむかは当然ながら人それぞれに異なる。そのいわば偏りをその人の癖と言ったり、場合によっては才能と言ったりするのではないだろうか。同じ仕事を飽かずに続ける中で、その偏りは少しずつ露わになり、それをかすかに自覚せざるを得なくなる。それにより、ことによれば人はいくぶん頑固にもなるのかもしれない。そして結果、それで良しとすることになる。良しとせざるを得ないことになる。感慨を込めてそう思う。

これまでずっと物を作ることへの興味の中心には、そこにある理屈、技術の面白さ、そこで構想され実現したものの大きさ、巨大さにあったように思う。建築を志したのもそこにあったのではないか。今日でも私の興味は建築より土木構築物に傾く。多くの場合それは圧倒的に建築よりも大きいからだ。19世紀末のヨーロッパ、分けでも英国の橋梁、駅舎、巨大温室などへの憧憬は深い。中で特に橋に傾く。橋は合理がなければ崩壊し合理的であればあるほど巨大になる。崩壊の事例にも事欠かない。なかでもエジンバラ近郊の鉄道橋フォースブリッジは私が最も愛するもののひとつである。であるから、私にとっての先達は当然のこととしてシビルエンジニアの巨人サー・イザムバード・キングダム・ブルネルということになる。ロイヤルアルバートブリッジは嚆矢であり、パディントンステーションは憧れの対象である。

あえて付け加えれば、これら100年以上の時を経た構築物が丁寧に手を入れられ尊重され使い続けられていることもきわめてうらやましい。この社会的合意=コンセンサスこそ先達としたいとも思う。

こんな話をよく交わした直近の先達は、藝大時代からの恩師、奥村昭雄であった。こんな話の中で半分冗談ではあるが、彼が19世紀のヨーロッパに産まれたかった

と言ったことがある。奥村はさまざまな事象をまずじっくりと観察することで咀嚼し自らのものとする人であった。彼のアトリエのある木曾の森は木材の宝庫である。そこで柘植の木を櫛に加工する職人の仕事を見ながら自らそのための工具を作り櫛を作り出す。桜の樹皮を加工し櫛のケースを作った。そこにある樹木によるたくさんの椅子をデザインし自ら作った。その制作にあたっては、既製の工具に装着する多様な治具を考案し生産の効率化を果たした。加工により算出する桜の廃材はチップとして利用することを思いつかせ、独自のハム燻製装置が考案される。この装置は冷凍機付きであり低温の煙による冷燻というきわめて高級な製品を製造するマシンであった。ついでに言えば彼はそれ以前に食肉処理の仕組みを学び豚の丸焼きのマニュアルを導き出し、学生とともに実行したりもしているのだ。カウンター越しに寿司職人を観察し、いつの間にか自ら寿司を握ることもあった。

建築家としての仕事に直接かわる領域においてもそのことは変わらなかった。とくにPCの登場が彼を高揚させた。ごく初期から独自の言語でプログラムを組み立て解析を試みる。そしてそのために実大の実験装置の建設を行うのである。彼ほどこの道具を自分のものとして駆使した人はいないだろう。40年ほど前に彼が気象庁のアメダスデータを建築設計のツールとして独自に使用可能にしたことは特筆すべきことと思う。

私たちの時代に至って、理屈、技術の面白さ、そこで構想され実現したものの領域は、それまで分け入ることが難しく不確かであった領域、特に環境といわれる領域に展開することになる。演算の驚異的発達をそれが可能としたし、今もそれは急速に精度を深めているが、奥村はそのもつとも初期もつとも先駆的な活動をまるで19世紀の発明家のごとく徒手空拳で自らの興味のみを力に切り開いていった人であった。私はその近傍で彼の検証を根拠とし実物の建築として実現、彼のシミュレーションを確認し実証すべく奮闘した。そしてそのことを心から楽しんだ。実に懐かしい。すでに四半世紀以上のときが経つ。

抱負を語る

建築を
仕事にすること

星野千絵



人生の中で「仕事」には多くの時間が割かれる。それなら好きなことを仕事にしたいと考えた。いま私が建築の仕事をしているいちばんの理由は、好きだからだ。将来の夢は？と大人に聞かれたら、ほとんどの子どもは好きなことを挙げるが、大人になるにつれ好きなことと仕事は必ずしも一致しなくなる。それが普通で、どんな仕事の業界でも好きでやっている人ばかりとは限らない。

しかし、建築の世界には「そもそも建築が好き」で仕事にしている人がとても多いのではないだろうか。労働環境がよくないので、好きでなければやれないのかもしれない。ただ理由はともかく建築が好きな人が多いということは、この世界にとって非常に重要なことなのではないかと感じている。それは、建築があらゆる面で大きな影響を持っているからだ。多額の費用がかかり人生や事業を左右してしまう。一度建てたら簡単に無くすこともできない。きびしい環境の中でそんな大きな責任を負いながら、建築の可能性を追い求めて仕事をやり続けるには、「建築が好き」以上に適した素質はないだろう。

ただ同時に、好きだからこそ乗り越えなければならないこともある。誰かの好きなものが、他の誰かにとっても好きなものであるとは限らない。好きだから続けられるし精一杯やるかもしれないが、できたものが施主や社会にとって意味のあるものでなければ仕事として成立しない。

JIAに入会して、まさに「建築が非常に好き」な皆様の熱意と探究心の中で、社会において意味のある建築を学んでいきたいと思う。



Book & Cafe stand Shinjo Gekijo

(写真：山内紀人)

抱負を語る

丁寧な仕事を以て
社会へ貢献する

村重盛紀



2008年に広島市の「平和大橋歩道橋デザイン提案競技」に参加した。結論から言ってしまうえば、箸にも棒にもかからなかったのだが、自らの建築に対するメルクマールとなっていることから、自戒を込めてここに記しておきたい。

イサム・ノグチが欄干をデザインした橋は平和大通り沿いに2本あって、東の元安川、西の太田川をつなぎ、竣工時は東側を「いきる」、西側を「しぬ」と言った。敗戦後の凄惨な状況や復興について象徴的に捉えられた名前もさることながら、彼の迫力ある造形に僕は魅せられていた。コンペの参加にあたっては、勇みこんで先輩建築家に声をかけたのだが、資格要件でつまづいた。方々の助けを借りて、地域の土木コンサルとJVを組んだまでは良かったが、考えが合わずに打ち合わせできず、先輩ともさまざまな問答があり、構造家、照明デザイナーとの段取り不足等々、無力さを痛感する連続で、いまだに思い出すと複雑な気持ちである。連日の徹夜作業明けで家族旅行に赴き、初日から寝込んで妻に迷惑をかけるというおまけまでついた。

私たちの提案は、姿かたちや構造的特性に至るまで美しい対比を成す、PCによるアーチ橋と鋼板サンドイッチスラブによる懸垂橋で、イサム・ノグチの生きる／死ぬに應じるものであった。技術的な問題とともに想いに至るまでを複合的に考え抜いた経験は、今でも大切にしている。

携わるプロジェクトにおいて、その時の自分が考えられることは「丁寧に考え抜く」ように。日々の現実の中でふと、あの歩道橋に立ち返り、心は青臭いあの頃のままでと常々思うのだ。



「いきる」とPCによる1径間のアーチ橋(案)

これからの空き家対策と 建築家への期待



市民未来まちづくり
テラス
建築・まちづくり
委員会
松本 昭

空き家対策事業から学んだ3つの事柄

郊外住宅地の空き家問題が深刻さを増している。筆者が所属するチームまちづくりでは、昨年度国土交通省補助事業の採択を受け、「郊外戸建住宅地における「自治会」×「NPO等」空き家対策マネジメント事業」を実施した。この事業は、良好な住環境を有しつつも、住民の急激な高齢化と住宅の高経年化という2つの老いを同時に抱える郊外戸建住宅地を対象に、住み継がれる住宅地をめざすため、

・「自治会」などの地縁組織が果たす役割の可能性と期待
・地元密着の「NPO法人」等が果たす役割の可能性と期待

について、八王子市北野台住宅地を対象に、地元自治会の協力の下、アンケート調査やヒアリング調査を行い、実施可能な空き家対策のモデルを検討した。

その結果、郊外戸建住宅地の空き家対策は、次の3つが重要との現場的知見を得た。

1つは、空き家対策は空き家を発生させない「空き家の発生予防」に重点を置くこと、2つは、自分が元気なうちに自分の住まいを責任ある所有者・利用者に引き継ぐ対策(住まいの事前活用)を講じること、3つは、「まちづくり」と「空き家対策」を一体的に推進すること、言い換えれば、空き家対策は、持続可能な住宅地マネジメントの取り組みである。

川下から川上の空き家予防政策へ

つまり、空き家対策は相続が発生してはじめて住まいの対策を講じたり、あるいは放置され危険や環境悪化が著しい管理不全の空き家を法律の後ろ盾により対処する「川下の空き家対策」だけではなく、住まいやその所有者・家族等の多様な状況を直視し、住まいの行末を専門家の力を借りて事前に決めておくことを「住まいを持つ人の作法」として国民意識に定着し、社会制度として機能させる「川上の空き家予防政策」が重要である。しかし、こうした国民的意識が醸成され、社会システムが機能しているとは言い難い。

昨年度、八王子市北野台住宅地の高齢世帯を対象にしたアンケート調査(回答数561)の結果、70%以上の高齢世帯が空き家対策を実質的に行っていないとの回答からも、その深刻さが窺える。

元気なうちに住まいの事前活用の定着を!

高齢単身者、高齢夫婦世帯の多くは、自分の土地・建物の行末は相続する子どもたちに決めてほしいと願っているが、相続人たる子どもたちの多くは、両親が建てた住まいの行末は子どもに任せるのではなく、自分で決めてから天国に旅立ってほしいと願っている。さりとて、高齢者が自分の住まいの行末を元気なうちに決めたいと思っても、どうアクションを起こしたら良いか分からないのが実情である。

遺言や生前贈与なら弁護士、家族信託なら司法書士、相続税対策なら税理士、リフォームやリノベーションなら建築士や工務店、建物の売買なら宅建士や不動産会社などと何となくは分かっているが、自分の健康や介護、そして金融資産や土地建物などの不動産、そして家族の将来などを考えて、自分の終活と住まいの終活のベストマッチングを見出すには、複数の専門領域をトータルでコンサルティングできる専門家や専門家集団が必要である。

「士業」と言われる我が国の専門家制度は、法令で規定された多様な社会制度ごとに、国家資格を有する「〇〇士」が存在する。しかし、人生の終活と住まいの終活のベストマッチングを見出すには、既往の縦割りの社会制度・社会システムを横断的に使いこなせる複合的な専門家や専門家集団が求められているのだ。

複数分野の専門家が連携協力して「人生の終活と住まいの終活の最良の選択(ベストマッチング)」という大きな社会課題に立ち向かうために、建築家はその中心的役割を担い、リーダーシップを発揮することはできるだろうか。

地域に残したい風景

—品川・大田エリアの景観・歴史・環境遺産—



城南地域会
木村利雄

2015年度第24回保存問題東京大会時に、東京13地域会の協力のもと「未来へ継承したい環境・景観・建造物・建築物」をテーマにまとめ、大会シンポジウムで各地域会から発表されました。その時の資料をベースに「未来へ継承したい風景」として連載いたします。

城南地域会は、品川・大田エリアを中心に活動しており、景観・歴史・環境等をテーマに、毎年2回まち歩きを行っています。地域に残したい風景をここに紹介させていただきます。

ドレメ通り

ドレメ通りは目黒駅に近いのですが、店舗などは比較的少なく、駅からの道の両側には三井情報センター、聖アンセルモ教会(A. レーモンド)、杉野学園建築群等が壁面後退をして配置されています。新雅叙園、農林中央会館、松井源吾邸、喜多能楽堂等はこの道から各アクセス通路の奥にあります。



ドレメ通り

小池公園

かつては洗足池の大池に対して、小池と呼ばれていた溜池の雰囲気を変えています。公園、水辺環境を活かし、身近な生き物の共生をテーマに整備しており、季節により野鳥の子育ての様子、サギ、カワセミなどが見られます。親水デッキを周遊すると、四季の野草、小魚の泳ぐ姿、夏にはトンボの飛び交う場面が観察されます。一般に住宅地にある池や小湖は危険防止のために高い柵を巡らせた調整池であったりして、住宅エリアから孤立している場合が多いです。小池公園はこれとは異なり、一般民家と一体になって保全整備されています。(大田区HPより)



小池公園

戸越公園

熊本藩主・細川家の下屋敷が始まり。その後、戸越屋敷として回遊式庭園などが整備され、明治維新後は久松伯爵等の所有を経て1890年に三井家に移りました。1932年には荏原区へ庭園部分が寄付され、1935年に東京市戸越公園となり、1950年に品川区へ移管されました。江戸時代の回遊式庭園の雰囲気が良く保たれ、品川区を代表する公園として知られています。



戸越公園

清泉女子大学本館(旧島津公爵袖ヶ崎本邸洋館)

東京都指定有形文化財

設計：ジョサイア・コンドル／1915(大正4)年竣工、1917(大正6)年落成

旧島津藩の所有で進駐軍に接収された後、横須賀の清泉女子大学が日本銀行から購入してこの地に移転しました。建築はルネッサンス様式ですが、1階はトスカナ様式、2階はイオニア様式の古典建築で、関東大震災にも耐えました。天井漆喰やステンドグラスは当時のままの姿です。ジョサイア・コンドルの力作で、数少ない現存住宅のひとつ。



清泉女子大学本館(旧島津公爵袖ヶ崎本邸洋館)

原美術館 (旧原邦造邸)

設計：渡辺仁／1938 (昭和13) 年

1938年に建てられた実業家・原邦造^{くにぞう}の私邸を美術館として活用しています。広大な敷地の中に和館の母屋がありました。この母屋を取り囲むように建てられ、建築家・渡辺仁設計による1930年代のヨーロッパモダニズムを取り入れた最先端の邸宅でした。(東京都庭園美術館HPより)



原美術館 (旧原邦造邸)

星薬科大学本館 (旧星製薬商業学校)

設計：アントニン・レーモンド／1924 (大正13) 年

ドーム型の屋根構造の下に1,228席の大講堂があり、ステンドグラスやアプローチのスロープとともに美しく、また玄関回りの庇等はF. L. ライトの影響もみられます。A.レーモンド設計の建物としても有名で、日本建築学会の「日本建築の名建築」として、また、品川区の「しながわ100景」にも選ばれています。



星薬科大学本館 (旧星製薬商業学校)

土浦亀城邸

東京都指定有形文化財

設計：土浦亀城／1935 (昭和10) 年

モダニズム建築家として活躍した土浦亀城の自邸。木造でありながらフラットルーフでスキップフロアを多用し、躍動感のある空間を作り出しています。昭和初期のモダニズム建築として住宅史に残る建築です。



土浦亀城邸

鳳凰閣 (旧清明文庫)

国登録有形文化財

1928 (昭和3) 年

清明会が文庫兼講堂として建てたもので、昭和初期の会館建築のひとつとして貴重。正面玄関から立ち上がる4本のネオゴシックスタイルの柱型や、アール・デコ調の建具などに特徴があります。(大田区HPより)



鳳凰閣 (旧清明文庫)

田園調布駅と町並み

駅舎は大正12年3月に田園調布環状道路の要の位置に、目黒・蒲田電鉄 (現東急目黒線・東横線) の西口の駅舎として設置されました。当時は、2階に食堂もあり、社交ダンスも踊られたといえます。(大田区HPより)



田園調布駅

私の家 (清家清邸)

国登録有形文化財

設計：清家清／1954 (昭和29) 年

戦後の建築制限時代の最小限住宅で、15坪から発展させて増築をして現在に至っています。敷地内には「続私の家」、「倅の家」、そして「貨車」等が配置され、本人の建築へのこだわりが、よく残されています。



私の家 (清家清邸)

空き家の再利用が求められるケースが多くなってきています。都市計画道路、老朽化等の要因により建物も存続を余儀なくされる場合があります。このような社会環境の中、建築家として建築文化の継承への努力を惜しむものではないと考えます。保存のための活用・再利用の方法など、さまざまな工夫と提案が社会から求められます。そのような社会的要求に応えるためにも、市民に愛され長く使い続けられる建物であるよう、建築家が主体となって見守る必要があるのではないのでしょうか。

築地・銀座周辺まち歩き（前編）

4回にわたり、建築家写真倶楽部の皆さんにご協力をいただきながら「写真」「建築写真」について連載しています。第3回、第4回では、まち歩きで撮影した写真を紹介します。

建築家には写真やカメラが好きな方が多くいらっしゃいます。その楽しみ方は人それぞれで、建築写真のような技術を必要とするものを学んだり、街の風景など日常を取めることで自分だけのアングルや、その時の自分の興味を認識できるのも写真の面白さでしょう。さらに、一緒に街を歩いても切り取る風景がひとりひとり違いますから、撮った写真を仲間と見せ合い、新たな発見をするのも楽しみ方のひとつです。

7月5日、梅雨の曇り空のなか、建築家写真倶楽部のメンバーでカメラ片手に東京・築地と銀座周辺を歩きました。歌舞伎座前に集合し、はじめに向かったのは伊東忠太設計の「築地本願寺」。大規模改修を終え、本堂前面広場などがきれいに整備されていました。「築地市場」は市場機能が豊洲に移転し、変わってしまった風景もありますが、まだまだ観光客の姿も見られました。

写真とともに撮影者のコメントを掲載します。

まち歩き参加者：兼松紘一郎、秋山信行、大澤秀雄、藤本幸充、野中 茂



■築地本願寺

実は初めて入りました。外と中の印象が全然違うのに驚きました。パイプオルガンをいつ使うのか気になってしまいました。(野中)



■築地本願寺本堂内部

煌びやかな内陣を遠望する席である。建物の荘厳な美しさもそっこのけ、これも伊東忠太の設計だろうか。この座席、座面が低く実に座り心地がよい。前の人に倣い、歩き疲れた我が身にひと時の安らぎを与える。(藤本)



■築地本願寺本堂入口

京都市にある「浄土真宗本願寺派西本願寺」の直轄寺院として東京築地に建てられたが、大火や震災によって焼失。1934年建築家でもある伊東忠太によって再建されたとのこと。時を超えて魅力的な建築である。

(兼松)



■本願寺横の自販機

坂なのに本願寺の立面図がピッタリ合っているのが凄い！（大澤）



■本願寺東側路地

本願寺の裏手に広がっていた築地市場も豊洲に移り、残滓のような風景を探した。ここもそのひとつ。銀座という高級な商店が軒を連ね、築地の料亭も華やかさを増すエリアにあって生活する人びとの多様性を見る思いがする。（藤本）



■波除稲荷神社

豊洲に移る前、まさに築地の中心に在る神社。祭りも行われ、依然伝統を守る格式の高い場。市場の中であってここだけ異色だが、樹木と暖簾？が結界の役目をしている。通常は市場側から木々に囲まれた神社を見るのだろうけれど、あえて姿は出さず神社の内から外を望む。（藤本）



■築地の町の商店街

東京銀座に近い築地の町は、大江戸線の開通で我が事務所の在った新宿からも行きやすいところになった。さてこの地を守る！波除稲荷神社に近い一角に、昔ながら！と言いたくなる風情の「築地銘店会」が発足された。掲載する写真は築地銘店会メンバーのお店（敬意を表して「お」を付記したくなった）。（兼松）



■築地市場

解体中の築地市場の海幸橋門周り。看板の「見学時間が来るまでは、何か買ったり食べたりしながら待ってろ」というのが面白い。（大澤）



■新喜楽

ビルの立ち並ぶエリアにあって、ここだけ木造2階家である。まさに料亭の外観。さすが吉田五十八、簾までしっかりデザインしている。建物全体を覆うほどの大きさが、一番下は格子で透かす。向かいのビルが見えそうところは細かな簾、庭の木々が見えるところには荒めの横格子。夏のさなか、座敷から見た涼やかな風景を彷彿とさせる。（藤本）



■電通本社ビル

近くの東新橋方面のビルである。築地を歩くと通りの先にたびたび目にする。現れ方が蜃気楼のようであって、曇天の時はなおさらである。ゆえに確実なランドマークになっている。目立つ高層ビルにもかかわらず、おぼろげな表現は日本的だが、確か設計はジャン・ヌーベル。（藤本）



建築家写真倶楽部の参加メンバー。左から、兼松、野中、秋山、大澤、藤本。

交流委員会 Bグループ

熱海サロン



交流委員会
法人協力Bグループ
代表幹事
化研マテリアル
正岡智子

交流委員会Bグループでは、毎年夏に、セミナーとゴルフコンペを組み合わせて、懇親を図る1泊2日の行事を行っています。ここ数年、夏の避暑地である軽井沢で行っていましたが、今年は海沿いの熱海を選択しました。

7月19日、観光客で賑わう熱海駅前に集合し、車で参加されたメンバーの車に分乗して、熱海駅から網代に向けてスタートしました。道中、熱海駅が新しくなっていたり、ここ数年落ち込んでいた観光客が戻りつつあるなど、久しぶりの熱海の印象は変わっていました。車中そんな話をしながら海岸線を走り、急こう配の坂道を上ると、セミナー会場であるヴェルビュー南熱海に到着しました。高台にあるホテルの広い部屋からは、眼下に海や初島が見渡せて、波の音と潮風が吹き抜ける、気持ちの良いリゾートホテルでした。

参加者全員がそろったところで、研修室でセミナーを開始しました。今回の講師は、お茶の水女子大学名誉教授の田中辰明先生にお願いしました。テーマは「外断熱の現状」で、省エネ改修の歴史から、現在の外断熱工事を行った高気密高断熱住宅の工事状況等を、たっぷり90分講演していただきました。

また、田中先生は、ドイツの建築家であり桂離宮など日本の美を再発見したブルーノ・タウト(1933年5月～1936年10月日本に滞在)の研究家でもあることから、ブルーノ・タウトの生涯や業績についても教えていただき、盛りだくさんの内容となりました。

セミナーの2部は、Bグループの保坂真美子先生から、収納について話していただきました。日常の片付けに関

する身近な問題提起と解決策をアドバイスしていただく、新鮮な内容でした。

セミナー終了後は、大浴場の温泉で疲れを癒して夕食タイムです。吹き抜けの大きな開口部から伊豆の海を眺めながら、海の幸山の幸を堪能しました。夕食後は、翌日の川奈ホテルのゴルフコンペに向けて、皆さん気持ちが高まり、ゴルフ談議に花が咲いて、早めの就寝となりました。

翌日は、心配された猛暑も和らぎ、曇り空ながら、まずまずのゴルフ日和でした。セミナー講師の田中先生も参加され、沖に見える大島に向かって打ち、ナイスショットの声と共にスタートです。川奈ホテルゴルフコースの大島コースは、起伏に富んだ海沿いコースで、波の音と爽やかな潮風の中でプレーをする、昭和3年に完成した格調あるコースです。カート乗り入れスループレーのラウンドスタイルで、4組のプレーは順調に進み、全員、川奈ホテルゴルフコースを満喫しました。

コンペの後は、クラシカルな雰囲気の川奈ホテルでパーティーを行い、成績発表と商品の授与です。参加者全員に素敵な商品を受け取っていただき、川奈ホテルのスタッフに見送られて帰途につきました。

今年も、セミナーとゴルフコンペを楽しく実行できました。ご参加いただいた藤沼傑支部長、河野剛陽交流委員長、Gグループの深滝准一先生、Bグループの渡邊顕彦先生、またご協力いただきましたBグループの皆様、心より感謝申し上げます。



川奈ホテルゴルフ大島コース



夕食時懇親

交流委員会 Fグループ

新宿地域冷暖房センター見学記



交流委員会
法人協力Fグループ長
小内 實

交流委員会Fグループ(建築設備施工者、関連メーカー)は、7月26日に東京ガスエンジニアリングソリューションズ社の「新宿地域冷暖房センター(以下新宿DHC)」を視察、33名が参加した。

新宿DHCは、新宿新都心の新宿公園側、新宿パークタワーに隣接した位置にある。新宿新都心地区に冷暖房熱源(冷水・蒸気)を供給する施設として、1971年の京王プラザホテル開業から稼働をスタートし、1991年の都庁移転などに伴って増大するエネルギー需要に対応するため、現在の位置に移転し、新宿新都心超高層街区全体に供給している。

施設の概要をビデオを交えて説明していただいた後、地域冷暖房施設を案内していただいた。現在の供給能力は、冷却214,720kW(61,000RT)、加熱139,055kWを有し、供給延床面積226万㎡の世界最大級の地域冷暖房施設である。2018年には7,800kWのガスコージェネレーション2基、吸収式冷凍機、ターボ冷凍機を導入するなどのリニューアル工事を実施している。高効率のガスエンジンコージェネレーション2基(15,600kW)による電気で、高効率のインバーターボ冷凍機4台(20,000RT)を稼働し、廃熱(蒸気)は吸収式冷凍機で無駄なく使用している。熱源効率の向上をはかり、リニューアル以前よりも年間14,000tのCO₂の削減ができたとのこと。

2013年より、供給エリアが隣接する「西新宿地域冷暖房センター(新宿駅寄りの西新宿一丁目地区に供給)」へ

熱融通を開始し、リニューアルが完了した新宿DHCの高効率機器を優先して運転することで、両DHCのトータルでの省CO₂、省エネルギーを実現している。

2012年からは東京都庁第二本庁舎に3,000kWの電気の供給を開始した。地域配管同道内に専用の送電線を敷設。都庁の電力の多元化を実現しBCP(事業継続)にも貢献している。供給される中圧ガスは、大地震にも十分耐えられる中圧導管で供給され、災害時の停電時にも自立運転対応型のガスコージェネレーションによる電力で、冷温水の供給と、都庁第二本庁舎、新宿パークタワーに電力を供給することができる。

新宿DHCは、供給開始以来48年が経過し、熱のみならず電気も効率的に供給し、低炭素社会をコンセプトとする街づくりの「スマートエネルギーネットワーク」の中核施設に進化している。

世界最大級ということで、通常ビルでは見ることができないとてつもなく大きな熱源機器と配管の大きさに圧倒された。最も大きな熱源機器は蒸気駆動復水タービン・ターボ冷凍機で、世界最大級の35,000kW(10,000RT)の冷却能力があり、同施設からの冷水管出口径は1.5mである。冷水・蒸気配管の総延長は8kmもあるとのこと。

見学会後の懇親会には43名の方が参加。Eグループから8名参加していただき、今までとは少し違った雰囲気で大いに盛り上がった。今後も他グループとの交流を深めていきたい。



新宿 DHC 供給範囲と導管布設状況(新宿地域冷暖房センターパンフレットより)



見学会参加者

まちづくり・酒づくり

私の住む町(群馬県佐波郡玉村町)に「まちづくり玉村塾」と呼ばれる活動サークルがあります。メンバーは一般の主婦、農業を営む人、議員さんなど多種多様な人たちが集まり、より良いまちづくりを目指して20年以上にわたり活動しています。

現役の酒蔵を使いジャズコンサートを行ったり、国重文の玉村八幡宮境内でペットボトルを使った灯ろう祭りなど、町民を巻き込んで活動しています。

その一環で、メンバーの農家の人から、うちの田んぼでみんなで酒米を作ったらどうかとの提案があり、実施しています。苗造りから田植え、雑草取りから刈り取りまでを不慣れながら楽しんでやっています。それを地元の酒蔵で醸造し、毎年12月20日ごろ、玉村八幡宮で新酒の会と称して、町長をはじめ多くの町民が集まり盛り上がります。

その酒瓶のラベルに私のスケッチ(写真)が使われていますが、現在このスケッチの建物は道路拡張のため取り壊されて新しくなり、酒蔵も後継者が無く、やむなく他に委託することになってしまいました。残った酒蔵を活用できないか模索中です。(羽鳥 悟)



行楽の秋

編集後記

■山も海も揃った屋久島の送陽邸、海に突き出たセルフビルド建築での食事とウミガメが最高です。(長澤)

■今年が多忙のためどこにも行けそうにありませんが、お勧めは瀬戸内芸術祭です。直島や豊島に思いを馳せつつ……でも来年は北欧かな。(関本)

■ここ10年、長野県の御代田町で「通い稲作塾」に参加してます。今年も収穫の秋が楽しみ!(会田)

■初夏に熊野に行きましたが、紅葉の秋も格別でしょう。ホテル川久は今はとてもリーズナブルでお勧めです。(中澤)

■標高1,289mの「ハクバマウンテンハーバー」で、白馬三山の美しいグラデーション「三段紅葉」を見てみたいです。(吉田)

■この季節になると行きたくなる北海道。数年前に行ったときは雨で見られなかった、開陽台をリベンジしたいです。(望月)

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会

委員長 : 市村宏文

副委員長 : 中澤克秀

委員 : 長澤 徹・会田友朗・古谷俊一・吉田 満・望月厚司・
小林哲也・関本竜太

編集長 : 長澤 徹

副編集長 : 会田友朗

編集ワーキングメンバー : 広報委員+中山 薫・有泉絵美・清水裕子・
八田雅章・立石博巳

編集・制作 : 南風舎

Bulletin 281 2019 秋号

発行日 : 令和元年10月15日

発行人 : 浅尾 悦子

発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA 館

Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294

印刷 : 株式会社 協進印刷

■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧

・(公社)日本建築家協会 (JIA) <http://www.jia.or.jp/>

・ JIA 関東甲信越支部 <http://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2019

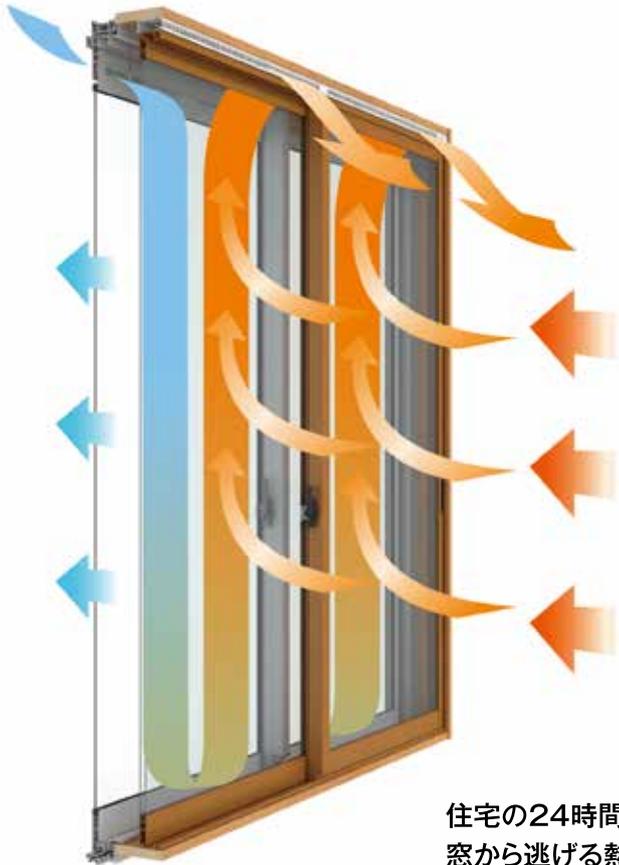


DI窓の説明動画
をご覧ください。

窓から逃げる熱を限界まで低減する!

当社取り組み「ダイナミックインシュレーション(DI)を用いた窓システムの開発」が
「平成30年度地球温暖化防止活動 環境大臣表彰 技術開発・製品化部門」を受賞しました。

商品特長



二重窓の性能をさらにアップさせた
より高い断熱性能



熱回収により外気が暖められることで
外からの空気が冷たくない



換気口と窓を一体化することで
24時間換気が可能



換気により空気が常に流れることで
結露が軽減



窓	アルミ樹脂 Low-E(A12)	樹脂サッシ Low-Eトリプル	DI窓	
			整流板仕様	断熱ブラインド仕様
熱貫流率(U _{day} 値)	2.33	1.3	1.2~ 0.4	0.9~ 0.2

低 ← 断熱性能 → 高
※全て引違い窓における性能 DI窓の性能(U_{day})は24時間換気使用時の性能

住宅の24時間換気のために取り入れる外気を、二重窓の内部に循環させ窓から逃げる熱を限りなく減らす、「新しい理論」に基づく超高断熱窓です。

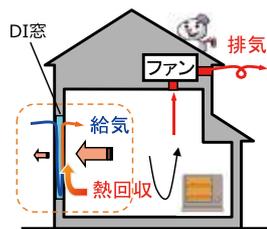
※DI(ダイナミックインシュレーション)窓はNEDO助成事業「戦略的省エネルギー技術革新プログラム」による研究開発の成果を活用しています。(特許取得済み)

ダイナミックインシュレーション(DI)窓 ※基本特許を取得済

外側の窓と室内側の内窓による二重窓とし、換気のために取り入れる外気を二重窓の内部に循環させ、窓から逃げる熱を回収することで、超高断熱を実現する新しい窓の形です。(図①)

冬場は、換気で室内へ入ってくる空気が暖められ、冬の換気による室温低下が抑えられます。さらに、乾燥した外気を取り入れることで窓回りの結露を防止する効果があります。加えて夏場は換気空気を逆に流すことにより、夏の日射熱の侵入を防ぎます。(図②)

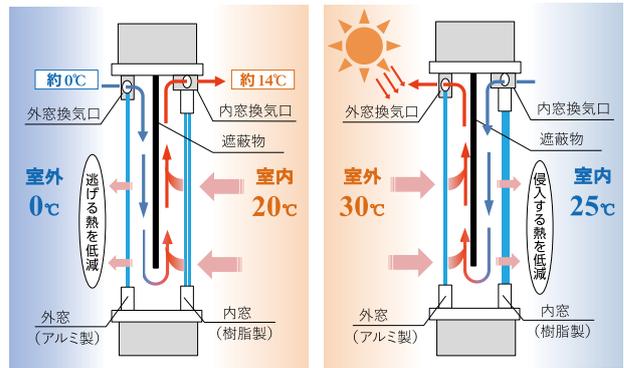
このDI窓の開発の成果は、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の助成事業の結果得られたものです。



(図①) 24時間換気イメージ図

※ダイナミックインシュレーション(DI)窓は、24時間換気の戸建宅や集合住宅での使用を想定しています。

(図②)



冬の場合

夏の場合

第2回 施設リノベーションEXPOに出展

【2019年12月11日~13日・青梅展示棟】

三協立山株式会社 三協アルミ社

《営業開発部》TEL(03)5348-0360